

911.3
八
春

非詩
卷八
春

題葉叙

世之所謂神祕者流言。

雜俎流俗話其摠情。

茲志以動物感人者往。



有馬斯編。敘和文題。
林抄。廣拾近代。攷句。
而取之。每題數十首。
合數千首。勤矣。

其中可喜。可樂。可嘆。
笑。可泣。倒者。種種情。
態。一而足。然以此。
編。非。唯。便。好。排。諧。者。

[illegible]

心をたそふれ歌うのわはをさふてま歌よたう
 いそ名を木と葉集の詠歌歌よもつてそるふ
 光るのふやとあかりふけいひをなみれん歌
 このもころのまねやわはゆるをまよふとあふ
 ち小龍をそるふけきとまほみまのまふ
 むふふふふふふ國あふそまふふふふふふ

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript, enclosed in a rectangular border. The text is written in a fluid, connected style with some variations in ink density.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript, enclosed in a rectangular border. The text is written in a fluid, connected style with some variations in ink density.

是よりおれちよくぞふせぬ事ありての歌
 へふも、御法師よりあるをいつちもほくらせ
 するも傳はくも、いふにふ人、いふはまありふ
 て人、おれちよくぞふせぬ事ありての歌
 後、おれちよくぞふせぬ事ありての歌
 へふも、御法師よりあるをいつちもほくらせ

ちよりのおれちよくぞふせぬ事ありての歌
 へふも、御法師よりあるをいつちもほくらせ
 するも傳はくも、いふにふ人、いふはまありふ
 て人、おれちよくぞふせぬ事ありての歌
 後、おれちよくぞふせぬ事ありての歌
 へふも、御法師よりあるをいつちもほくらせ

いふはあ

いふはあ

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style typical of early modern European cursive.

見例

一頁書元禄の記... 手紙の文... 元禄の記... 手紙の文... 元禄の記... 手紙の文... 元禄の記... 手紙の文...

題名凡例

一 題の増山井正とてこれみれば月空鳴鶴と書
きしきとてこれとて植交の松影にけし生類
はるかに一 意見やとて正むねとておのれを
たふさるあり

一 古人とて其家集出づるをまよふ用れある
を此氣に松撰並流とより松出と人のうへ海
ふかふかしてそのめしこれ生涯の作とて
比篇集なりとてよりすまぬ此集ありと
再集古書の撰とていふれ松撰といふれ
一の順古人とて此集よりいふ人より老
と何れこれとていふ集よりいふ集とて

一 貴族のつとれとて入るるを松の撰とて
松とていふるあり

一 風雅をその時代とていふる凡て松とていふ
又その人松集をいふるその人松集をいふる
身松をいふるその人松集をいふる
一 集より集とて同題のつとてて集のつとて
を松とていふるの松集をいふる松集をいふる
老松とていふるあり

一 古人の名とていふる松集をいふる松集をいふる
松集をいふる松集をいふる松集をいふる
松集をいふる松集をいふる松集をいふる

一 種名を初め國に記すは春の初めなり此の
 名を初めたるはこれより記しこるなり 同
 日名の凡士をまゝしんふ名を記し
 一 政事たる人あはれを記するもあつたれこそ
 初めれり人あつたれこそ
 一 古く今に記すは松の落葉のまゝあつたれこそ
 第一とてあつたれこそあつたれこそあつたれこそ
 此を初めたるはこれより記しこるなり 同
 凡士は初めたるはこれより記しこるなり

俳諧歌句題叢書春總目録

春之上

正月

初

臘月

二

歳旦

立春

初鶉

初鶉

今初春

初代

神

六

初代

菴

老

年

初夢

祇園刺

年徳

門

注連

元日

初空

初霞

今日

家

初

初東風

四方

萬

明年

初日

明

五

花

松

市

東

門

錦

饒白	雜黃九	蓬萊	福萊	初寅	馬玄始	松離	水祝	若萊	松の肉	萬歲
越延	屠蘇	吟娛	初曆	市評	弓始	諺初	子日	七種十三	飾焚	大思舞十五
穗儀	齒固	螺者十	書初	二月	初玄始	萬所	小松成十三	蘇離十四	松過	鳥追
若水	太著	庭寔	寢棲	三日	着衣始十二	年男	人日	若夷	春約	

傀儡師	初芝居	振い	若餅	總安七	福壽豆	芥	下萌	豆芽廿	梅廿	浦梅廿二
縣石	破魔弓	宝戔	福涌	津忌	藤葉	仙の座丸	鹽	木芽	月茶梅廿六	野梅
猿安	進羽子	春下	粥杖	本地ゆげ	水菜十八	藻苔	初豆	藤芽	夜梅三十	生梅
國栖奏十六	手毬	鏡餅	左義長	店卸	芹	雪菜	若菜	角祖芦	折梅卅一	宿梅卅三

散梅	雁梅	红梅	松着绿
松花 卅五	柳 卅六	刺柳 卅一	椿 卅二
号 卅三	百子 卅九	白鱼	幌 卅十
蛤 卅一	刺	懒学鱼	养父入
葩 卅二	海苔	海雲	若和布
余 卅	表 卅	顷 卅三	霞 卅四
於 卅五	夕 卅六	山 卅七	冰 卅八
海 卅	障 卅	春 卅八	残雪 卅
春 卅二	淡 卅二	雪 卅	雪 卅
春 卅三	春 卅	凍 卅	水 卅
暖	长 卅	佐 卅	山 卅

表 卅

二月 卅五	衣更着	二月 卅六	鬼押聚
初 卅	事 卅七	新 卅	开 卅
温 卅	西 卅	暖 卅	北 卅
貝 卅	積 卅	彼 卅	治 卅
鵬 卅	然 卅	表 卅	表 卅
表 卅	鷹 卅	德 卅	伯 卅
泊 卅	多 卅	多 卅	多 卅
鷲 卅	巢 卅	雛 卅	燕 卅
松 卅	春 卅	鸛 卅	雲 卅

雀子

牝

煙九十四

大蛇步

孕麻

初雷

燒野

苗代

麻荷

蕨

胡葱

春多六十六

牝九十九

初銷

地虫

廉落角

初紅

山燒

水口虫

種芋

大華

蒜

蝶六十七

牝九十三

飯銷

猶魚九十五

陽火九十七

麻力

田抄百

種卜百

木實極

松菜百二

席杖

牌八十九

田螺

奇居虫

春麻九十六

桑提九十八

公代九十九

烟抄

種荷

獨活

嫁菜

三三三

芋芳

蒲公英

大根花

茄子苗

海木

彼者楓

三月百十一

雛系百十二

沙干

率入

芥子差些

菊百四

五百草

菊植

初楓百八

桑楓百十

上巳

弥生

多餅百三

安良多百五

菜菜菜

苣

山葵百七

楓苗

待花

上巳

鷄合

硯取

永日百五

春菜百三

菜花百五

烏芋

刺木

初花

曲木

多食

壬午念仏

遲日百六

其日 百七

白物

今法

夕機

厘機 百八

花雪

花雪

海棠

木瓜花

鹿梅

其元

桑摘

山機 百

夜機 百其

花 百廿九

花雪

花雪吹

花雪 百九

辛夷 百三

沈丁花 百五

李花

其夕

桑摘

機 百五

散機 百其

花雪 百五

花凡

花凡 百廿七

挑 百

躑躅

木蓮花

連翹

步寒 百六

菓子 百

新機 百五

八重機

花雪

花雨 百廿六

折花 百廿八

梨花 百廿三

山吹 百五

櫻花

馬蹄木

橘花

紫樓

二月大根

藤 百十九

困荒化成熟

雲入

物紀

表露

表水 百七

表反

表身

八加木

董 百六

二月葉

水至生

表熟

呼子

若能

表雨 百三

表海

表近

表身 百六

橘葉

芽花 百五

若花

存生初 百五

若葉

引物

表牧

春人

表水 百五

指表

二月尾

橘麻

青表

表菊

蛇出穴

鳥鳴

橘網

別雲

表山 百五十六

夏隣 百五十九

表別

表雜 百六十二

五紙本

猪丘太第輯

函
力

ふたのふちちり小織人

五月や女最のものもあきめ

西乃七言詩人

西月平爲惜子付了生財

正力も力の長きより

西月火桶抱了梅儿氣

五九のそゑ、田子余り、

正月の灯籠の夜

西乃の書

伊勢

搏
良

京

園
更

10

全

尹

凡量

法

其青
五川

卷一

可 33
皇 亡

浪石

竹筴

嬰

可治至

初鶉

初鳥

思つ代を中ふ初めの句は
志す所や松の根ふ初め
大やを懐くや句は初め
これいづれもめたる初め
松井ふやを懐く初め
つれう初めはあま初め
初鶉のあやを初め
初めやまを初め
人もあま初め
初鶉わつた初め
一歩ふく初め

素郷 在亞
常笠 乙卯
楚山 伊豫
齊山 戸
春媛 春
曉基 重原
恒丸 下弦

初霞

初のま

初鳥ついでに書く
華の松ふあつた初鳥
海をむす初鳥
松いづれも初鳥
基ふあつた初鳥
松ふあつた初鳥
やうくも初鳥
はも初鳥
松のまは初鳥
あつた初鳥

一方 美集
存亜 双樹
成美 一草
午心 寒松
月曉 恒丸
下弦

春風吹綠柳
燕子剪輕盈
桃花紅似火
楊柳綠如煙
燕子剪輕盈
桃花紅似火
楊柳綠如煙
燕子剪輕盈
桃花紅似火
楊柳綠如煙

春風吹綠柳
燕子剪輕盈
桃花紅似火
楊柳綠如煙

春風吹綠柳
燕子剪輕盈
桃花紅似火
楊柳綠如煙
燕子剪輕盈
桃花紅似火
楊柳綠如煙
燕子剪輕盈
桃花紅似火
楊柳綠如煙

春風吹綠柳
燕子剪輕盈
桃花紅似火
楊柳綠如煙
燕子剪輕盈
桃花紅似火
楊柳綠如煙
燕子剪輕盈
桃花紅似火
楊柳綠如煙

春風吹綠柳
燕子剪輕盈
桃花紅似火
楊柳綠如煙

春風吹綠柳
燕子剪輕盈
桃花紅似火
楊柳綠如煙
燕子剪輕盈
桃花紅似火
楊柳綠如煙
燕子剪輕盈
桃花紅似火
楊柳綠如煙

時
慶

年五

1875

物夢

物类

初まや小虫のなつたつた
 清きく人むすけはし
 較ふまゝを洗つておき
 ままの葉もつゞき親れ
 りう菴やうたのまゝより
 まゝに葉をいさる木の葉
 のまのまゝにふり電の
 初まやもかたきく親の
 まゝやほまのちふふ
 初まやをいさるた
 初まやもけり井垣も武の

信流

春
咽

曉
基

道
義

宗瑞

一
卷

萬

護物

宣
原

護物

卷

解

东风

旅園割賦

年遠邈

四方祥

同
松

物車風や二日に吹く月も
物車風や病のあけぬ松
床をうつて車風あゝかお枕の
枕病も車風をうつていまだ
裁て還て笑ふやをけりけ
き柳や二日後の春のけ
春中をふふきうより四かね
月松のふふきやのふふき
松をうつ人のけきふふき
ふふきをうつ人けきふふき
折てふふきも月松をうつ

山城

午

道
貴

重行

星譜

藏六

存
西

斗

卷之五

下

泰 祥 瑞 康 平 福
 永 泰 萬 年 昌 興 隆
 萬 年 昌 興 隆 萬 年 昌

下弦 戶 厝
素葛奇道蒼成大保印也原
迪三例夷帆英左吉雄智更

游 蹤

乙素護蕉素月印祐几鹿素
 二桃物雨架屏昌董野琬

人
菜

人のや女の中一歌みは使
人のれを年する休あか
人のうらめしきま腹か
人のやまあつ月ハハの上
りれつじんふれを志つ
かふふやあひさる菜か
れの百に搗てまひが菜か
み菜かひ持てまひと裸文
ふふや待てふれのみ菜つ
里人のあひさるみ菜か
み菜かおより句ふ書め

撰

撰

撰

葛三 蕉雨 虎角 吳老 曉雲 柳良 春鴻 虎國 保吉 八明

ナ
外

老うむみ菜を人のりひる
多のふれあつみ菜の細道
きくの菜を人ふれみする
りふのふれあつみ菜か
み菜のむれあつみ菜か
鶏のふれあつみ菜か
常と二人あつみ菜か
爛朝のれあつみ菜か
常と二人あつみ菜か
りふのふれあつみ菜か
りふのふれあつみ菜か

陸奥

出

士 今 外 菜 尺 道 一 草 奇 倒 雷 雄 阿 藏 篤 老

七種

鄙るりハ丸まなりもあ葉搗
さうれハ中葉おぬるあ葉賣
かんおれなりもあれのけま
あまもあ葉ふくれぬまけい
人のまわりてあうあ葉あ
雪たけの葉問んあ葉賣
あ葉あや何もたああ人の
あ葉あ初るるあもあ葉あ
仲あやあ葉ああ葉あ
七ハあ葉の細の片あ葉
七ハあ葉のあ葉あ葉

今 雅 倒
蕉 雨
万 和
若 人
大 種
秋 夫
簾 守
李 尺
印 羽
荻 村
几 童

七種

七種

七ハあ葉のあ葉あ葉
七ハあ葉のあ葉あ葉
七ハあ葉のあ葉あ葉
七ハあ葉のあ葉あ葉
七ハあ葉のあ葉あ葉
七ハあ葉のあ葉あ葉
七ハあ葉のあ葉あ葉
七ハあ葉のあ葉あ葉
七ハあ葉のあ葉あ葉
七ハあ葉のあ葉あ葉

保 奇 長 出 双 周 印 樗 葵 菊 管
右 側 高 甫 更 雄 棠 亭 吹 笠

弟軍の己に神を心戸に
 のありしや里弟軍を本腹
 弟軍や子持胤もあなれ
 約多小大軍を足さうれ
 多小村の度うくうの月
 去約やふの持る小居のれ
 據多ふけあふして傀儡師
 多細居の梅もぬく傀儡師
 多細居の梅もぬく傀儡師
 鞭とて左短の猿舞し
 猿曳や鞭の走る人

常陸 上野 尾張
 由之 笋露 徐英
 遅月 龜水 太紙
 玄性 湖中 葵太
 今 完未

式部

少輔

多のりくもが子猿舞
 藝あり小猿平正月小神
 猿曳はれも深心の木立
 猿曳ふもあすや舟わじ
 大くおて舞うこもぬ猿の猿
 舞猿ふもやあ枝ゆいし
 必掬くもいふふの氣れ
 金平も破をうけて初芝居
 多のりくやあすやあの家
 子持あうたれ演の友多
 取子家やあすやあの家

常陸 尾張 上野
 知新 左門太 蕉雨
 瓢箪 樗堂 成美
 東叡 重厚 素迪

手毬
ちりく
寶曳
番下
鏡餅
若餅
粥
粥
杖
左義毛

汁湯より鞠をひきひき
ちりくやあるは漆乳の枕も
宝曳の器れやまの費ひあり
ちりくは梅ちりくを番下し
鏡餅母死て又急し
若餅やけりて梅の心
若餅やるゝ急を驚か人形
志小神費なりて粥し
粥杖やあるは急のあふき
かめ杖やあつてあつては可なり
おの存ふとんよのあつてあつて

成美
重厚
素玩
瑞馬
一茶
鶴老
成美
几童
完未
尺又

調
曳

序
忌

本地旅路
店
節
福来子

左義毛の小屋よある。先
隠しや去者の八束徳より金
隠しはちやのあつてふ時
隠しのうゝるをちや松の風
はるの鏡しちや急の水あ
ま柳のうゝるも急の水
大おれる雪を急ちや急
うけしちやちや急
梅咲て本地の旅路の急い
この家の古簾はめ店節
これく起ちおけ所福来子

里人
兼太
護物
氣来
荻村
樗堂
希言
瑞馬
素卿
丈左
以足

蕨 菜

蕨菜を二本并て喰ふに
喰ふもこれあるや蕨菜を
執るの中は喰ふに蕨菜を
蕨菜をこの年の冬のある
春とあるもきくは蕨の葉
よりやや老てふきく蕨菜
魚籠の片を喰ふ蕨の葉
蕨の葉を更けを喰ふ
夕にや折るほろろ蕨菜
蕨菜のほろろはこれお
はれやうと数のきく蕨の葉

戸 肥 箭

女 房

尺 丈
葛 三
其 映
白 素
蕨 村
五 吻
保 吉
大 丸
道 虎
一 草
斗 白

水 菜

今あるてふと喰ふに蕨の葉
川の邊の水菜は是の水菜
芥菜は是の水菜の葉は
これより徑長きや芥菜の
あるはこれに喰ふや芥菜の
葉は是の水菜の葉の葉
芥菜の葉は是の水菜の葉
沈糸の葉は是の水菜の葉
溝川のすんで喰ふや芥菜の
葉は是の水菜の葉の葉
芥菜の葉は是の水菜の葉

常 陸

武 蔵

播 磨

文 川
乙 二
千 尋
蕨 村
几 童
保 吉
若 龜
一 草
瓜 坊
道 虎
今

草

雪の根の氷うけり花の葉
青の根の氷うけり花の葉
青の根の氷うけり花の葉
青の根の氷うけり花の葉
青の根の氷うけり花の葉
青の根の氷うけり花の葉
青の根の氷うけり花の葉
青の根の氷うけり花の葉
青の根の氷うけり花の葉
青の根の氷うけり花の葉

雪 桐 萬 槌 花 青 柳 莫 道 屋
雪 桐 萬 槌 花 青 柳 莫 道 屋

仙の庵

下 朋

草

草

雪の根の氷うけり花の葉
青の根の氷うけり花の葉
青の根の氷うけり花の葉
青の根の氷うけり花の葉
青の根の氷うけり花の葉
青の根の氷うけり花の葉
青の根の氷うけり花の葉
青の根の氷うけり花の葉
青の根の氷うけり花の葉
青の根の氷うけり花の葉

雪 桐 萬 槌 花 青 柳 莫 道 屋
雪 桐 萬 槌 花 青 柳 莫 道 屋

物草
若草

初まやうすの史をるるも
 あまや繁ふ枝うたすも
 あまやるはるすはあま
 印砂や骨のあま吹かすし
 月しやうあまももも
 あまや起はれあまも
 田原やあま吹かすも
 あまや吹かすも
 あまやあまのあまの枝
 あまの上はあまの枝
 あまやあまのあまの枝

道夷
 印輝
 春冰
 武青
 叙来
 道夷
 常盤
 椿堂
 武陵
 文兆

草芽
木芽

あまやうすの史をるるも
 あまや繁ふ枝うたすも
 あまやるはるすはあま
 印砂や骨のあま吹かすし
 月しやうあまももも
 あまや起はれあまも
 田原やあま吹かすも
 あまや吹かすも
 あまやあまのあまの枝
 あまの上はあまの枝
 あまやあまのあまの枝

梅阿
 井徳
 夫山
 鬼平
 樗堂
 印輝
 五明
 成良
 長山
 白年
 杵白

梅の木のてふにきく
 木もくも向梅や手天香の
 坂よりを遠く梅のち梅の
 梅のいあやう同の林の
 緋や隣りや梅のふ
 梅はくや隣をのち梅の
 向梅や定家文庫のち梅の
 梅のふあやう梅のふ
 梅のふあやう梅のふ
 梅のふあやう梅のふ

出 男 野

成 虎 貞 馬 秀 保 全 斗 恒 大 羅
 青 國 松 曹 和 吉 入 九 魯 城

梅

向梅の半あやう梅の
 梅のいあやう梅の
 梅のいあやう梅の
 梅のいあやう梅の
 梅のいあやう梅の
 梅のいあやう梅の
 梅のいあやう梅の
 梅のいあやう梅の
 梅のいあやう梅の
 梅のいあやう梅の

梅

在 洪 莫 希 松 若 全 五 士 全
 亜 道 六 二 言 兄 翁 趙 訥 訥

梅之香如故也
梅之花如故也
梅之葉如故也
梅之根如故也
梅之枝如故也
梅之果如故也
梅之神如故也
梅之魂如故也

森子序の本河の本を梅の
 梅のいさや本河を出る
 人の本にうりはめり梅の本
 梅はとやうきつる人ほり梅
 秋や風の光代葉の本
 片例ハ石切きや梅の本
 いさるもまき本にき梅本
 葉の戸や梅の本枝をきれば
 この梅咲てお梅のほりし
 こりき風や梅のさき
 何風も本河の梅のほりし

京 信濃 桑 京 京 桑 京
 申 三浦人 汝蘭 奇閑 芦涯 篤亮 喜高 龍外 今 于常

四六日の旅をむくよ梅本
 見ておれ本河さる梅本
 山陰のけり梅も咲き
 梅もむくやれ梅本
 常とくも梅は咲き
 思ふもさる本河梅本
 梅の本に人ほり梅本
 梅りの度おきる本河
 んより余計さる梅本
 男もいさる梅のけり
 ーら梅をきる本河

京 桑 京 京 京 京 京 京 京 京
 而池 梅阿 葵亭 吳老 卓池 志宇 藍雲 其成 桐栖 子と 演藻

梅はくく心おれぬ山崎の
 梅はくく心おれぬ山崎の
 梅はくく心おれぬ山崎の
 梅はくく心おれぬ山崎の
 梅はくく心おれぬ山崎の
 梅はくく心おれぬ山崎の
 梅はくく心おれぬ山崎の
 梅はくく心おれぬ山崎の
 梅はくく心おれぬ山崎の
 梅はくく心おれぬ山崎の

護物 方 金 漫 大 雙 孔 京 山 戸
 芦 空 凡 勢 龍 曼 信 戸
 錐 門 峯 阜 鳥 卵 漫 曼 金 方

梅はくく心おれぬ山崎の
 梅はくく心おれぬ山崎の
 梅はくく心おれぬ山崎の
 梅はくく心おれぬ山崎の
 梅はくく心おれぬ山崎の
 梅はくく心おれぬ山崎の
 梅はくく心おれぬ山崎の
 梅はくく心おれぬ山崎の
 梅はくく心おれぬ山崎の
 梅はくく心おれぬ山崎の

護物 方 金 漫 大 雙 孔 京 山 戸
 芦 空 凡 勢 龍 曼 信 戸
 錐 門 峯 阜 鳥 卵 漫 曼 金 方

金谷 九似 李基 一素 宇拘 南井 一曉 携厨 帶携

月か梅

梅干は毒あり梅の皮も
 起すは梅を食ふは毒也
 及雪の日に食ふは梅の皮
 曉中梅も食ふは毒也
 人梅に毒は食ふは毒也
 人梅に毒は食ふは毒也
 能くも毒は食ふは毒也
 梅の皮も食ふは毒也
 梅の皮も食ふは毒也
 梅の皮も食ふは毒也
 梅の皮も食ふは毒也
 梅の皮も食ふは毒也

葉
 葉
 葉

全重五周青太汝即字里普
 厚内更節南山玉九記

梅干は毒あり梅の皮も
 起すは梅を食ふは毒也
 及雪の日に食ふは梅の皮
 曉中梅も食ふは毒也
 人梅に毒は食ふは毒也
 人梅に毒は食ふは毒也
 能くも毒は食ふは毒也
 梅の皮も食ふは毒也
 梅の皮も食ふは毒也
 梅の皮も食ふは毒也
 梅の皮も食ふは毒也
 梅の皮も食ふは毒也

葉
 葉
 葉

全重五周青太汝即字里普
 厚内更節南山玉九記

道江 尾張 伊勢 京 浪高
寒松 千影 公 蕉 少 其 無 梅 武 朱 推
已 彦 凌 價 曲 雲 汝 雨

夜梅

本よりしるお返し梅の月
有るやと云ふ梅のときも
あつたやうなものと梅は
梅がけかあつたかあるを
この尻もあつたやうに梅の
花もあつたやうな梅の花
あつたやうな梅の花
いふをうらなふなと梅
大風の心をきくやうな梅
梅の本にかゝる月の白く
火ともたぬ梅のよる

甲斐
下弦 阿波 下弦 角張 近江 赤松
秋舉 吳亮 詠序 惟平 荆玉 布雪 阙風 春雄 西岐 曉臺

人言れ有むに似る梅見の
 庭よりけし梅よりけし梅の梅
 梅よりけし梅よりけし梅の梅
 梅よりけし梅よりけし梅の梅
 中天の梅よりけし梅の梅
 宵周の梅よりけし梅の梅
 梅よりけし梅よりけし梅の梅
 宵周の梅よりけし梅の梅
 梅よりけし梅よりけし梅の梅
 宵周の梅よりけし梅の梅
 梅よりけし梅よりけし梅の梅
 宵周の梅よりけし梅の梅

信濃 石 阿波 豊
 完 如 桂 有 羅 斗 青 綺 鉄 菓
 来 毛 五 園 篁 城 入 搗 石 船 太

折梅

梅よりけし梅よりけし梅の梅
 梅よりけし梅よりけし梅の梅
 梅よりけし梅よりけし梅の梅
 梅よりけし梅よりけし梅の梅
 梅よりけし梅よりけし梅の梅
 梅よりけし梅よりけし梅の梅
 梅よりけし梅よりけし梅の梅
 梅よりけし梅よりけし梅の梅
 梅よりけし梅よりけし梅の梅
 梅よりけし梅よりけし梅の梅
 梅よりけし梅よりけし梅の梅
 梅よりけし梅よりけし梅の梅

信濃 石 阿波 豊
 完 如 桂 有 羅 斗 青 綺 鉄 菓
 来 毛 五 園 篁 城 入 搗 石 船 太

梅折ふるのされ先通りなり
 梅を折きてては流しなり
 折るより友にて梅を折盡し
 枝折るより年立けて梅折ぬ
 折るしあやふ梅の指しれ
 しのふ二人しを梅折
 折きて梅を折ぬるなり
 梅を折ぬるのふのふなり
 一木ふ折や其角の梅のふ
 梅折や月を交するなり
 ふ梅折やとてこれ物なり

唐 虞

雲 五 雲 似 卧 士 今 雲 蕉 少 文
 鳴 江 危 央 饒 雄 雨 汝 兆

浦 梅

那 梅

乙のふ梅折るなり梅のふ
 梅折るなりきとふの上
 梅折や旅の短き小役人
 浦の梅折るなり梅のふ
 うふふ梅折るなり梅のふ
 松ありて波も知らぬ梅のふ
 梅のふの限も知らぬ梅のふ
 梅のふのふふふ梅のふ
 梅のふのふふふ梅のふ
 梅のふのふふふ梅のふ
 梅のふのふふふ梅のふ

唐 虞

唐 虞

廉 瑞 蒼 曉 鉄 貞 恒 魯 柳 鉄 斗
 馬 我 臺 船 松 竹 居 船 入

中樞秉樞存乙希有樗年帟道
樗良亞言罔篁雲心杖爲

松花

柳

花をさす酒をさる松のふ
松のふ柳のふふふふふ
花ありや指ふ付る松のふ
松のふはつふふふふふ
花よりさる酒より松のふ
花よりさる酒より松のふ
松のふ布同尾のふをさる
花ありや指ふ付る松のふ
すう見て星はかりま柳の
旅人の見てり門の柳の
ま柳ふふふふふふふ

下 考 壁 原

曉 今 樗 素 馬 奇 而 保 公 而 確

松若緑

松若緑の二木ありて待てり
松若緑の二木ありて待てり
松若緑の二木ありて待てり
松若緑の二木ありて待てり
松若緑の二木ありて待てり
松若緑の二木ありて待てり
松若緑の二木ありて待てり
松若緑の二木ありて待てり
松若緑の二木ありて待てり
松若緑の二木ありて待てり

一茶 雄鷹 篤老 護物 樵村 鉤鼠 鬼平 蝶夢 士朗 巴檜 素郷

松花

松花の二木ありて待てり
松花の二木ありて待てり
松花の二木ありて待てり
松花の二木ありて待てり
松花の二木ありて待てり
松花の二木ありて待てり
松花の二木ありて待てり
松花の二木ありて待てり
松花の二木ありて待てり
松花の二木ありて待てり

中雄 保吉 奇例 奇非 馬周 素岐 樗良 今曉

柳

人きて世中の柳風を
 其柳や二筋三筋老木も
 葉の暖はめて春を来
 火よりのかき来る柳は
 道の辺や柳よかる木の角
 軟陽より木々の柳光嬌
 柳るほや柳見て道る木の柳
 柳るほや木々をきく人の柳
 常はほや人の柳るほや
 同き柳るほや木々を
 木々をきく柳るほや

几係岱今向薺今今周柳今
量告青 輝太 更居

を病の如き一葉の柳は
 傾きてありぬる柳は
 はらふとて柳に通じ侍のお
 まけ柳や細かひまきの糸
 柳見たり人さへ筆数はん
 まけ柳や裾よがもる地のち
 まけ柳や梅は冬の白炭俵
 ちりやうそくそくこの柳は
 夕柳　春も夏も雨も来にり
 まけ柳や地をさし立てるべき花
 まきの人も柳をかたけり

即青市左五馬宗秋今而漢
央阿圖有內碑漢瓜

其柳の柳を石を柳をよまふ
 夕月の柳を近よる柳を
 月をに描て百もち手柳を
 其柳の大和の國をよまふ
 其の柳の長きをよまふ
 其の柳の船を出る柳を
 其の柳の舟を動かす柳を
 柳を其の舟を動かす柳を
 市立の人よ柳を柳を
 其柳の舟を動かす柳を
 其柳の舟を動かす柳を

存 自 大 希 可 恒 舛 祺 士 公
 垂 案 江 言 案 九 六 道 飢 堂

其柳の舟を動かす柳を
 柳を其の舟を動かす柳を
 一絲の舟を動かす柳を
 松越の舟を動かす柳を
 其柳の舟を動かす柳を
 人の柳を動かす柳を
 其柳の舟を動かす柳を
 柳人を動かす柳を
 中への舟を動かす柳を
 其柳の舟を動かす柳を
 其柳の舟を動かす柳を

柳 馬 公 柳 公 柳 公 柳 公
 堂 印 山 翠 兆 居 山 美 公

春臺 三顧 半心 可於里 一草 力居 全道 全

今蓄塊今岳今百今蒼今乙
二最輅池帆二

八九折あを片も柳の
 柳柱て儀のをあへるれ
 こけくや獨を話やと柳の
 其柳やとて定家の柳の
 灯より見ても常多柳の
 其柳やとて動く柳の
 簾中のをれや柳の柳の
 人添ひんをれと柳の
 柳より見ればいと新の家
 かゝるれや柳の柳の
 と娘も其柳の陰ふ夫や柳の

少女 柳門 素葉 其柳 魯隱 量雲 奇閑 冥中
 伊 宗

其柳小簾けへと其柳の
 破れれば其柳の
 吹よれて其柳の
 と其柳の
 其柳の下の館の
 皮剥つ腰に柳の
 其柳の枝の
 也つと其柳の
 其柳の
 其柳の
 其柳の

五哥 千鬘 振別 長高 一葉 蕉雨 秋夫 五鹿 其眠
 伊 宗

海ふふふりかり柳の
 枝の腰も柳の葉毎に
 ま柳や惜守のぬけ網代家
 ま柳の夕よりくさ張られ
 門柳まをさういのちと
 面うさうの星りの柳か
 かま柳や柳の市の中
 ま柳やあかりてあか
 金柳てしな柳ふらめ
 涙の光る柳の向か
 ま柳のくささる花

葵亭 復物 野松 壺半 春魯 卓池 氣外 喜富 梅岡 瑞馬

大別ぬふや中いさ柳
 ま柳のまをさうのさか
 はふふふふふふ柳か
 ま柳やあかりてあか
 ま柳の夕よりくさ張られ
 門柳まをさういのちと
 面うさうの星りの柳か
 かま柳や柳の市の中
 ま柳やあかりてあか
 金柳てしな柳ふらめ
 涙の光る柳の向か
 ま柳のくささる花

漫々 志宇 井眉 高頂 安阿 可友 其成 湖中 其成 七卯

春柳ふさふさしる戸に
 柳よふさふさあるものぞ
 柳よふさふさあるものぞ
 大柳を押し倒したる柳
 春柳のふさふさあるもの
 留まらず柳のふさふさ
 顔のふさふさある柳
 春柳のふさふさあるもの
 春柳のふさふさあるもの
 春柳のふさふさあるもの
 春柳のふさふさあるもの

青梁 轆之 古梁 其映 布席 素迪 推己 秋鬼 俳佛

春

柳

春柳ふさふさしる戸に
 柳よふさふさあるものぞ
 柳よふさふさあるものぞ
 大柳を押し倒したる柳
 春柳のふさふさあるもの
 留まらず柳のふさふさ
 顔のふさふさある柳
 春柳のふさふさあるもの
 春柳のふさふさあるもの
 春柳のふさふさあるもの
 春柳のふさふさあるもの

桃村 祇三 五葉 菊塙 竹枝 李尺 柳江 野遊 陰水 荃村 曉臺

題叢春

十一
九

一草 一茶 一蒲 人 雙 柳 寸 五 乙 祐 有 簞

博學 丈夫 完來 千尋 乙二 玉屑 一草 道考 葛三 雷輝 奇溪

節をききかきしるは
 多きとて逢き枝のりぬ
 葉のうしろも花のいそぎ
 有させとよくしるは
 横多村のききかきしる
 山風の吹くはき枝の
 庭の枝果報なりはぬ
 花枝のうしろも花のい
 多きとて逢き枝のりぬ
 葉のうしろも花のいそぎ
 有させとよくしるは

樗櫟 丈左 完未 千尋 乙二 玉屑 一草 道彦 葛三 電燈 奇測

月夜思
 月夜思
 月夜思
 月夜思
 月夜思
 月夜思
 月夜思
 月夜思
 月夜思
 月夜思

其
 雨
 自
 來
 其
 雨
 何
 處
 何
 處
 守
 三
 文

下
 集
 卷
 集
 京
 堂

詩

月夜思
 月夜思
 月夜思
 月夜思
 月夜思
 月夜思
 月夜思
 月夜思
 月夜思
 月夜思

村
 公
 曉
 臺
 公
 樁
 公
 曉
 臺
 公
 樁
 公
 曉
 臺

萬壽無疆
 萬壽無疆
 萬壽無疆
 萬壽無疆
 萬壽無疆
 萬壽無疆
 萬壽無疆
 萬壽無疆
 萬壽無疆
 萬壽無疆

壽

全保公感虎溪
 全保公感虎溪
 全保公感虎溪
 全保公感虎溪
 全保公感虎溪
 全保公感虎溪
 全保公感虎溪
 全保公感虎溪
 全保公感虎溪
 全保公感虎溪

萬

萬壽無疆
 萬壽無疆
 萬壽無疆
 萬壽無疆
 萬壽無疆
 萬壽無疆
 萬壽無疆
 萬壽無疆
 萬壽無疆
 萬壽無疆

壽

重厚
 大龍
 中圖
 全五
 斗入
 羅綺
 全五
 斗入
 羅綺
 全五
 斗入

此乃余之自序也
 余之自序也
 余之自序也
 余之自序也
 余之自序也
 余之自序也
 余之自序也
 余之自序也
 余之自序也
 余之自序也

權

希言
 公恒
 披恒
 挂柳
 似欲
 存
 國
 臣
 地
 昌
 民
 莊
 及
 九

此乃余之自序也
 余之自序也
 余之自序也
 余之自序也
 余之自序也
 余之自序也
 余之自序也
 余之自序也
 余之自序也
 余之自序也

阿波

士
 今
 今
 今
 今
 今
 今
 今
 今
 今
 今

京

今居青島美成完全
上可居

嘗の志ふくく入る物吉也
 嘗にたれんちちたれ吉なり
 美多や汝おちる国もちち
 嘗ふひく位けく教本也
 嘗の第代こめ初音也
 嘗の初教うける残帳也
 嘗や田つより来て見ふ
 及古棲て嘗やえん夕ん
 嘗龜の嘗同て居ふ多
 嘗の改ふあり小教也
 嘗やらの嘗吹も初也

下野

全 端 素 一 乙 全 全 道 全 月
全 煇 廖 草 二 二 亭 居

常小をいふはきく陽の如
 常小橋多き小里の
 常小あゝとさうそ某の店
 常の古女房もありぬ
 常の奇麗小娘も小雨の
 常の東向ありありすれ
 常のちかほはきいて世の初言
 常やぬれぬほするも井の
 常やいさゝ楓はくされ木
 常とそりくのあそびも
 常やさういふもいふも

末

萬二 今 瓜坊 素師 尺艾 今 養帆 振別 宣雅 龍司 瓦全

常の果報やんちんちん
 常をきいてさうきう
 常もあつてはなす柄柄
 常の南へもあつた
 常を同じもはる
 常もあつた
 常もあつた
 常のふりて静かなる
 常のふりて静かなる
 常のふりて静かなる
 常のふりて静かなる

常

寒松 月化 常笠 眞人 今 少汝 魯隱 長高 今 桃雲 奇閑

秋夫 井眉 秋華 廉古 高頂 戴少 揭嘉 阿休 旭夫 靜島 石海

片里ふを雪のうらふ
 雪のうらふ雪のうらふ
 雪のうらふ雪のうらふ
 雪のうらふ雪のうらふ
 雪のうらふ雪のうらふ
 雪のうらふ雪のうらふ
 雪のうらふ雪のうらふ
 雪のうらふ雪のうらふ
 雪のうらふ雪のうらふ
 雪のうらふ雪のうらふ

雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪
 文 師 文 師 文 師 文 師 文 師 文 師

雪のうらふ雪のうらふ
 雪のうらふ雪のうらふ
 雪のうらふ雪のうらふ
 雪のうらふ雪のうらふ
 雪のうらふ雪のうらふ
 雪のうらふ雪のうらふ
 雪のうらふ雪のうらふ
 雪のうらふ雪のうらふ
 雪のうらふ雪のうらふ
 雪のうらふ雪のうらふ

雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪
 文 師 文 師 文 師 文 師 文 師 文 師

之網
 三才人
 以弓
 桐栖
 一茶
 奇倒
 尺艾
 去蟻
 士魂
 左吻
 智醉

二柳

下
上
乙
一
大
屋

九
九
二
波
輝
幹
子
馬

春
寒

春
寒

春
寒

お布をからやれとて来ては
真海の底もまじりてお布は
周代戸の大陣ちりてお布は
まじりてお布はまじりてお布は
お布も出てあるからお布は
鳴りてお布はまじりてお布は
演先や昼のお布をまじりて
お布のお布はまじりてお布は
お布もまじりてお布はまじり
お布はまじりてお布はまじり

漢

葉北

花枝

葉村

樗堂

葉北

葉北

奇閑

杜夷

推已

葉北

葉北

宋

陸

お布をからやれとて来ては
真海の底もまじりてお布は
周代戸の大陣ちりてお布は
まじりてお布はまじりてお布は
お布も出てあるからお布は
鳴りてお布はまじりてお布は
演先や昼のお布をまじりて
お布のお布はまじりてお布は
お布もまじりてお布はまじり
お布はまじりてお布はまじり

几

外

樗堂

葉北

道彦

瑞

三

天民

丘

葉北

葉北

葉大樹様の木皮で河はる
市のおや河はる貴大に
篠の葉大を風に別添す河はる
河はる河はる河はる河はる
鶴橋のいづらへてや荷 雲
雨凡の一歩もなくて雲
江も向てうや雲のたつこ
あふさふさ雲がなるくさ
鏡接ぎてあふれりなむ雲
深飯の振舞ひあふれんか
刈りの新より雲む替わ

肥戶

岸展天外寄詞申爲柳居而保寸春今存

加獎女

[illegible]

恒九 士龍 長翠 坡灰 去穢 樗雲 可翫 成英 今乙 今二

道高 今長 一茶 月居 東鄉 玉屑 驚筵 護物 野泉 幽嘯

氣は心臓の心乾りのれ
鳴りて候ふ處の氣は
おそれられてひらめく氣は
ちやうどひらめく氣は
不斷なる人も氣むや細る
りけりて氣の心乾りや
みだりて氣は心乾りや
候ふ處の氣は心乾りや
ちやうどひらめく氣は
不斷なる人も氣むや細る
りけりて氣の心乾りや
みだりて氣は心乾りや

雙 龍 葉 紅 膏
學 懶 柳 已 吳 暗 桐 雙 慢 橋 香
九 中 左 順 來 牛 杯 湖 同 人

新氣

妻飯て解もつるのそと
ゆふもたに春のあひ下
氣のや成るをさるるの面
枯井に氣をさるるの
ひつふた埃掃ふに氣の
炭のふもあつて出れき氣
ふもに氣をさるるの
殊有ふのうつた氣
巨魁出ておの國のさあぬ氣
ふにすむふもやわたりぬ氣
たきけふらんをわぬ氣

由之 米友 材唐 一壺 有丘 樗良 几童 琪道 士誠

久氣

あつた何ゆやち新氣
有雪のほろに氣の新
そわくふもかれ酒の新氣
ぬきをむすふと所新氣
曉の海風拂きて新氣
雪風の葉やそらの新氣
あつたふもをぬく新氣
ふもに氣をさるるの
ふもに氣をさるるの
ふもに氣をさるるの
ふもに氣をさるるの

可如 道彦 月居 葛乙 僕人 己蘭 虎道 文冲 花村 曉急 保吉

夕霧のれゝ女のまね
 鴉帽子きて踊るれゝ夕霧
 細きも日はやれ夕霧
 夕霧あはれの雨をかきゆ
 夕霧ほろりひきて着るも
 中へあけ帳をさるる夕霧
 霧のや夕霧のけの笛
 釣はるる魚よりや夕霧
 乙葉の霧をばはるるれ
 け合の煙と着る霧の
 貝餅や来りて見る霧

乙亥

[illegible]

海氣

舟のまゝに氣くのかたあり
海に漂ふ國を抱て氣く
沖に帆の揺るやと夕氣
陽の光をききてハハハ
帆を揚る舞臺の言やハハ
氣をききてふきききき
海に氣をききてハハハ
かゝりの鐘耳に氣をきき
鐘の音田一枚宛氣をき
破鐘の音めをききき
鐘の音めをきききき

鐘 耳 出 丹 加
語 一 蒼 印 松 洪 尺 後 乃 今 新
馬 葉 丘 旗 江 水 市 川 破 燐 燐 眉

春風

弓矢の片神脱て春の風
春風や肩よりあふれふ
春風の音をきききき
春風ふいてきて春の音
画双の音をききき
春風の音をききき
春風やうれうれ
春風ふいてきて春の音
春風の音をききき
春風の音をききき
春風の音をききき

加 賀
佛 保 而 今 而 今 几 燐 曉 今 周
仙 貴 唯 人 唯 葉 葉 葉 葉 葉

土室面や鼻の穴より其の風
 九丈母を被るもかき其の風
 其風や裸脊より出以男ども
 岩根り人ふいゝと其れ風
 赤松のあらふさるゝ其の風
 其風や面大ぬのいゝゝら
 其風にふささむちのすゝん
 よる波ふぬきけを其の風
 枯葉や一重のれゝ其れ風
 其れきりを撰出で其の風
 其れもふんあふもあふ其の風

涼秀
 春曉
 五响
 斗入
 全
 重原
 天老
 青川
 恒丸
 騏六
 士

其風や狗もあてゝ其の風
 其風や砂浜の古橋より越る
 木の針のぬきをや其の風
 其風やさか野のふさふさ其
 松風の下をふさ其の風
 其風のぬきをや其の風
 其風やふさ髪角力其
 秋風も其風もやき其の風
 其の風松床踏てふん其の風
 其の風をふさ其の風
 吹たて其の風を其の風

全
 布舟
 丈方
 呉山
 眉尺
 長翠
 一
 檣
 五
 南
 乙

題此最春

まだの白きてふもるる風
 まだの白きてふもるる風
 まだの白きてふもるる風
 まだの白きてふもるる風
 まだの白きてふもるる風
 まだの白きてふもるる風
 まだの白きてふもるる風
 まだの白きてふもるる風
 まだの白きてふもるる風
 まだの白きてふもるる風

伊豆

一子
 道考
 全
 三
 百
 一
 寒
 奇

おす

本のおふ吹きとまの風
 本のおふ吹きとまの風
 本のおふ吹きとまの風
 本のおふ吹きとまの風
 本のおふ吹きとまの風
 本のおふ吹きとまの風
 本のおふ吹きとまの風
 本のおふ吹きとまの風
 本のおふ吹きとまの風
 本のおふ吹きとまの風

陸奥

九
 梅
 小
 雲
 文
 徐
 魯
 千
 葵
 龍
 虎

わろいふて様もさ
まの雪雪のよきさ
まの雪雪に様と
まの雪雪なる人
まの雪雪のさ
様人
まの雪女の結に
まの雪おひ
海に
まの雪
まの雪
まの雪

斗入
存里
松井
士
全
長
樗
今
梅
申
高

漢雪

雪解

新といふも
ちる雪の下
おひら
まの雪
寺入の小解
穴言の
漢雪
漢雪
漢雪
雪解
雪解

一
双
大
義
文
一
草
老
思
曉
而

題
最
春

霄
汁

常盤てい類とて夕馬
常盤や割木の上れ拒米
輪の葉のやとふに常盤は
常盤あふをうてゐるや祖の魁
常盤てまゝ松ありあつて
常盤や辺ありする妹のた
常盤や井を花の十の
この常いづれとれは類
松を誘ひあはれや常盤川
と花の壁を建てや常盤は
石原や篠の常汁下はる

抄撰

代志 八 叢 考 乙 一 蒼 松 守 靜 保 壽

陳去書
解嚴實

三

暖

長閑

人恋しきの雲の桐火桶
小窓あられ雪はれぬる其心
もよみ氷流る雪川に如
氷は流るる見れば春と
雪鳥雀のふもゆるごとく
ふゆるむやゆひの又なる
ありて見る雪はなのはそ
暖い風志めりたるや萩の中
常夏ても心も春に成らん
木末はや岩の端の雪もせ
木末と一いつく城地を

武庫

奇樹園更一茶道隣釣菴美萊斗入素丸

東 東 東
雲 雲 雲

一草 道彦 喜哉 喜坡 一蕙 芳洲 而非 成美 一礪 策兆 青嶠

丘慙
竹丈

聯語集

夜更思

垣松さる鶴に二月の地
有の雨ははる梅の二月
咲みくふもさる二月
雪の小鳥やふも二月
月よりさる梅も二月
炭の火の歌ふさる二月
蝶ちるやふも二月
二月のふもさる二月
ぬれや入の底にさる二月
ぬれや霜月ぬれにさる二月
夜更思や内義のぬれにさる二月

月化 平角 葵亭 魯隱 一作 中 印 士 道 月 化 道 彦

二日矣

ぬれや鶴にさる二月の地
有の雨ははる梅の二月
咲みくふもさる二月
雪の小鳥やふも二月
月よりさる梅も二月
炭の火の歌ふさる二月
蝶ちるやふも二月
二月のふもさる二月
ぬれや入の底にさる二月
ぬれや霜月ぬれにさる二月
夜更思や内義のぬれにさる二月

今 旗 節 花 金 護 地 月 底 鶴 老 几 董 二 顧 一 草

題叢春

鬼押参

初午

二日

初よりや張られたる鬼前
 初より人収りて秋の月
 初よりその控賣にのある
 初より切ぬ波治屋も於留
 初より命いさうらけ賣
 初よりセウのすのりり
 初より親の名をけり地波治
 初よりやふけけれ心取
 初より負れたるも尻け
 初より息んおれする乳母の言
 初よりや唐あつる心計ころ

集

柳凡
 向氷
 荻村
 柳居
 真太
 市権
 保吉
 左方
 馬十
 博常
 一草

事納

新能

元雲修治

涅槃云

初よりあつる心計ころ
 初より小敷とれて時
 便和もいひとれるや中納
 初より毛とりたてり
 偽親の息んおれする
 親能や新ありを吹ける
 ありて戸姓に落て心の月
 心より誰もあるぬ涅槃像
 涅槃云や飯に飯を喰う
 而白いさるる息や涅槃像
 糸のつらも心の月れり

集

共成
 馬嶺
 道彦
 護物
 蝶夢
 見車
 方水
 博良
 青菴
 馬碑
 白旗

心之思慮何如思樂水
 既思之人心何如思水
 思樂之人心何如思水
 思樂之人心何如思水
 思樂之人心何如思水
 思樂之人心何如思水
 思樂之人心何如思水
 思樂之人心何如思水
 思樂之人心何如思水

德

保壽
 春斗
 五重
 明
 全
 易
 可
 趙

思樂之人心何如思水
 思樂之人心何如思水
 思樂之人心何如思水
 思樂之人心何如思水
 思樂之人心何如思水
 思樂之人心何如思水
 思樂之人心何如思水
 思樂之人心何如思水
 思樂之人心何如思水

德

丁
 丈
 鄉
 毫
 物
 為
 解
 燈
 村

題
 春
 取
 聖
 題

暖我柱松の
北村葉花
町供

貝寄風

横塔云
彼岸云

松のや産の林はゆふより
あつたは塔をされぬ供は
貝よをやあつたはり横貝
貝寄の風は柳に海ひより
横塔や柳の衣に風ひより
いん中に入るふたする入る
吹れて柱は海も彼岸のちり
山はより梅の葉を揺ひより
傘を揺ひにひより彼岸
山に山より清のさる彼岸
これとてとも志あるいん

方山 扶馬 車庸 恒丸 戸雁 馬疎 南権 今 萬三 養 石和

治勢海
勢力

あつたはりいんの力にまふ
松の本をゆふのさるいん
治勢海や先貝中利いなる
横のれいふい勢力なる
海をさるふたよりや勢力
山はより人い飯森や勢力
馬疎の痒と風を揺や勢力
あつたはり山を揺や勢力
さるふたよりいん勢力
産のされば南のさる勢力
山はよりいん交れ勢力

勢見 友梅 柳居 善村 今 二柳 秋瓜 以哉 斗入 保吉

入舟のききりや能
 能月海吐く入るかの
 能くそすありたり松の
 葉うそけのきより能
 月能下能き習ふうみ
 能くそすありたり松の
 葉うそけのきより能
 月能下能き習ふうみ
 能くそすありたり松の
 葉うそけのきより能
 月能下能き習ふうみ

其
 存
 士
 凡
 七
 南
 華
 其
 振
 道
 其

多ありうき能や月能下
 向海の能くそすあり
 能の海よりしるを能
 能のききりや能
 能月大す人の海より
 戸の能や大の能てり
 能のききりや能
 能のききりや能
 能のききりや能
 能のききりや能
 能のききりや能

其
 存
 士
 凡
 七
 南
 華
 其
 振
 道
 其

春 花

春 花

春の花は 春の風と 春の雨と
 春の光と 春の香と 春の色と
 春の音と 春の味と 春の触と
 春の思と 春の情と 春の志と
 春の行と 春の言と 春の徳と
 春の徳と 春の徳と 春の徳と
 春の徳と 春の徳と 春の徳と
 春の徳と 春の徳と 春の徳と
 春の徳と 春の徳と 春の徳と

春

春

春

春の徳と 春の徳と 春の徳と
 春の徳と 春の徳と 春の徳と
 春の徳と 春の徳と 春の徳と
 春の徳と 春の徳と 春の徳と
 春の徳と 春の徳と 春の徳と
 春の徳と 春の徳と 春の徳と
 春の徳と 春の徳と 春の徳と
 春の徳と 春の徳と 春の徳と

春の花は 春の風と 春の雨と
 春の光と 春の香と 春の色と
 春の音と 春の味と 春の触と
 春の思と 春の情と 春の志と
 春の行と 春の言と 春の徳と
 春の徳と 春の徳と 春の徳と
 春の徳と 春の徳と 春の徳と
 春の徳と 春の徳と 春の徳と
 春の徳と 春の徳と 春の徳と
 春の徳と 春の徳と 春の徳と

春の徳と 春の徳と 春の徳と
 春の徳と 春の徳と 春の徳と
 春の徳と 春の徳と 春の徳と
 春の徳と 春の徳と 春の徳と
 春の徳と 春の徳と 春の徳と
 春の徳と 春の徳と 春の徳と
 春の徳と 春の徳と 春の徳と
 春の徳と 春の徳と 春の徳と

舟楫のふもいんやばる力
 其の力に雪のまつく休む
 けりくと雪のふより其の力
 新白のつゆもけり其の力
 力更なるまをけりめり
 とおとふ小松にあるまの力
 其のまの力にいてていふの上
 思入のけりけりまの力
 夕原をけて出たり其の力
 まの力うれ移り人にて
 其の力まにひるけりけり

寒松 長富 冥く 魯隱 木海 于雷 漫こ 若人 葵亭 雪の

春
 ね

とハチかこぎ出るハチの力
 舞送るハチにけり其の力
 急越の一かき着て其の力
 けりけりハチとハチの力
 めつとハチに其の力
 けりけりハチにけり其の力
 居れハチにけり其の力
 道菜の鬼ハチにけり其の力
 其のハチにけり其の力
 其のハチにけり其の力
 其のハチにけり其の力

長老 白鹿 漢木 南平 香泥 國丸 花村 曉甚 全

春

春の夜や袖を踏みては小坂を
春の夜や袖を踏みては小坂を
春の夜や袖を踏みては小坂を
春の夜や袖を踏みては小坂を
春の夜や袖を踏みては小坂を
春の夜や袖を踏みては小坂を
春の夜や袖を踏みては小坂を
春の夜や袖を踏みては小坂を
春の夜や袖を踏みては小坂を
春の夜や袖を踏みては小坂を

几董 悠青 縁石 五明 斗入 全下 其川 士切 全 樺堂 丈左

春

春の夜や袖を踏みては小坂を
春の夜や袖を踏みては小坂を
春の夜や袖を踏みては小坂を
春の夜や袖を踏みては小坂を
春の夜や袖を踏みては小坂を
春の夜や袖を踏みては小坂を
春の夜や袖を踏みては小坂を
春の夜や袖を踏みては小坂を
春の夜や袖を踏みては小坂を
春の夜や袖を踏みては小坂を

成美 全 年心 可於里 蒼乳 蒼云 雪笠 百池 葵亭 奇例 虎外

題北叢春

春 霄

春の夜を静かに坐して
春の夜を静かに坐して
春の夜を静かに坐して
春の夜を静かに坐して
春の夜を静かに坐して
春の夜を静かに坐して
春の夜を静かに坐して
春の夜を静かに坐して
春の夜を静かに坐して
春の夜を静かに坐して

漢 堂

漫 双 文 桐 梅 桃 杜 荳 全 方 葉
居 所 栖 夫 棠 年 村 水 卿

鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹
鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹
鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹
鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹
鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹
鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹
鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹
鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹
鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹
鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹

鷹の夜を静かに坐して
鷹の夜を静かに坐して
鷹の夜を静かに坐して
鷹の夜を静かに坐して
鷹の夜を静かに坐して
鷹の夜を静かに坐して
鷹の夜を静かに坐して
鷹の夜を静かに坐して
鷹の夜を静かに坐して
鷹の夜を静かに坐して

鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹
鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹
鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹
鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹
鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹
鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹
鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹
鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹
鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹
鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹

其 友 向 鵲 芳 道 和 向 全 百 保
友 友 友 友 友 友 友 友 友 友
友 友 友 友 友 友 友 友 友 友
友 友 友 友 友 友 友 友 友 友
友 友 友 友 友 友 友 友 友 友
友 友 友 友 友 友 友 友 友 友
友 友 友 友 友 友 友 友 友 友
友 友 友 友 友 友 友 友 友 友
友 友 友 友 友 友 友 友 友 友
友 友 友 友 友 友 友 友 友 友
友 友 友 友 友 友 友 友 友 友

龍
 集
 子
 卷
 之
 三
 第
 一
 集
 子
 卷
 之
 三

其
 第
 一
 集
 子
 卷
 之
 三
 第
 一
 集
 子
 卷
 之
 三
 第
 一
 集
 子
 卷
 之
 三
 第
 一
 集
 子
 卷
 之
 三

道
 力
 承
 雨
 放
 七
 寸
 文
 石
 茶
 代
 良

題
 集
 春

本
 集
 子
 卷
 之
 三
 第
 一
 集
 子
 卷
 之
 三
 第
 一
 集
 子
 卷
 之
 三
 第
 一
 集
 子
 卷
 之
 三

在
 東
 曉
 全
 向
 全
 几
 二
 柳
 野
 有
 係

道考
今乙
月居
月記
壽倒
一茶
魯隱
精堂
少汝

かきまき雪あけしわりのお
川舟のあは起りてりまのお
新玉根にもくまのお
まのおききにほふまのゆかり
網の糸よるおももろのま
まのおうたふて地をん
まきけるまの屋とちなるこ
そめ色のこねまりまのお
松山を伝へゆるるまのお
まの時てほろくあなをみりか
鳴るまのまぬすれ海のみ

權衡
梅間
秋舉
夜來
秋夫
我少
雲卿
畫齋
素月
棋枰
李尺

題

春之風は吹く
もはや春の風は吹く
春の風は吹く
春の風は吹く
春の風は吹く
春の風は吹く
春の風は吹く
春の風は吹く
春の風は吹く
春の風は吹く

春之風

春之風は吹く
春之風は吹く
春之風は吹く
春之風は吹く
春之風は吹く
春之風は吹く
春之風は吹く
春之風は吹く
春之風は吹く
春之風は吹く

春之風は吹く
春之風は吹く
春之風は吹く
春之風は吹く
春之風は吹く
春之風は吹く
春之風は吹く
春之風は吹く
春之風は吹く
春之風は吹く

春之風は吹く
春之風は吹く
春之風は吹く
春之風は吹く
春之風は吹く
春之風は吹く
春之風は吹く
春之風は吹く
春之風は吹く
春之風は吹く

題

河よりいへるもふれなり
雨れんを定りて飛乙を
つるもそのいさしは流の上
夕乙をふかきけをたあらし
慈母てのそけいなるま腹か
娘人にききとけりたる乙を
乙をの来てはとれ長と
去るの来て初めは研の小衣
乙をや惜ま女はうへと
きも来てはつりきもきと
乙をやあましけりまのもの

完来
玉屑
鰯
一茶
孔亭
瑞
一瓢
三人
幽甫
復物
我少

魚
笠
響
約

親をれるんふかたぬつはめ
位果ぬ前太事つる乙を
乙をや来りもあはれまに
き軍兵あつた飛つはめ
見ておれはあはれもの
健や煙れをいさつはめ
魚をに親とあつても来し
你ふふれをいさつはめ
思所や能もあはれまの
飛のふれ思ひなる響の
年のあふ人に約もあはれ

文角
地甫
鬼洞
内典
糸月
太節
成美
寒松
白権
菊度
向権

松花鳥

春 乃

約きうくや約親の切結はなる
 はあれやちぢに焚火の煙つれ
 子代をゆる枝もきく松むじ
 きのに會れさふと松むじ
 きのアのやや枝にぬきき
 きののちやまをいれを送る
 きの氣あふまうこやアのや
 ありぬやのこいそぬきのア
 けいこ人もをんじきのア
 ちよと海田きくきのア
 けのをやうぬきくきのの

籠り

保吉 吉雄 雨鉾 樗雲 保吉 吉雄 斗入 有篋 乙二

屏 乃

きのアきけいぬとありい
 海人の子だくぬききのア
 け松にきぬききとぬきア
 きのゆききぬきのきのア
 きのいぬきぬききのア
 きのきぬききぬきのア
 きのきぬききぬきのア
 きのきぬききぬきのア
 きのきぬききぬきのア
 きのきぬききぬきのア

下座 座 末 座

仲高 寒松 仰先 代李 魚雲 鰐龍 益村 全 饒基 全 向旗

かんがもてアのこれの
 萬うしをさるに海ア
 文はヤアにゆるる海車
 凡そこの戸をゆてるる金波の
 来よりもめてたまたや海ア
 ぬたうちや海に針てうア
 海そとるる金波の海の虎
 ぬりて海ぬアさきりぬ
 大うい海りそて雨れ海
 アきてあもそとるる海
 葉喰も海の時ふや花よ

全 保 凡 諸 五 斗 露 洪 恒
 全 保 凡 諸 五 斗 露 洪 恒
 全 保 凡 諸 五 斗 露 洪 恒

二海二海が死てえに海一
 海はうしをさるに海ア
 リアの海もさるる海車
 海そとるる金波の海の虎
 ぬりて海ぬアさきりぬ
 大うい海りそて雨れ海
 アきてあもそとるる海
 葉喰も海の時ふや花よ

士 博 業 全 成 全 一 大 全 養
 士 博 業 全 成 全 一 大 全 養
 士 博 業 全 成 全 一 大 全 養

海へ流さるるをいふとそ
 りてはさしそめくる海へ
 那しとれく流のけさすの記
 古ぬアやそれある山の歌
 ゆくアれさるるをいふとそ
 周のアれさるるをいふとそ
 鳴りていふとそアやそれ
 海へ流さるるをいふとそ
 松とれ油断とそゆとれ
 りん頃とそ風小田の
 大井の中を流さるるをいふとそ

新門
 道考
 乙二
 羅風
 百池
 萬之
 梅雲
 尾金
 奇閑
 玉屑
 雪機

りん頃とそ風小田の
 大井の中を流さるるをいふとそ
 松とれ油断とそゆとれ
 海へ流さるるをいふとそ
 鳴りていふとそアやそれ
 周のアれさるるをいふとそ
 ゆくアれさるるをいふとそ
 古ぬアやそれある山の歌
 那しとれく流のけさすの記
 りてはさしそめくる海へ
 海へ流さるるをいふとそ

一茶
 葵亭
 蕉雨
 権例
 万和
 卑池
 黒銘
 千影
 一峯
 帰雲
 巨例

雲 雀

夏のあけはすかたもよく
ひらけに風をふくとゆふ
ゆふも人のうへとむね下
りてふりのはいふもあけ上
りのまゝはひさしにひくを雀
川あやひさしにひくもあけ下
ふつふとあけに入ると風鶴か
鶴垣のとつれにより揚ひさ
雨をわふさふりてひくひさ
たふや雀すくねりふ雀
地をひきてひくをふさ雀

録 帰
吾友
侯 藻
柳 中
周 更
金 左
子 代
曉 基
金 全
向 権
金 本

舞あつて門然りや雀か
あき代まき舞ふいさふり
ふ法の極めを登るを雀か
大膽に舞ふいさ舞を雀
そ雀あやへつとみさ入連
ふけさじ枯木代よの夕を雀
守さうのいふて仕書にむ雀か
やうその雨や雀代本にむ雀
まよふに眼が霞たの揚ひさ
ねうさてひいてふさ雀か
あけしふいさふさ雀か

伊勢

柳 居
舞 々
几 童
男 醉
春 修
岱 春
詰 六
為 貞
士 朗
芳 之
成 貞

舞を花屋上の枝にのれり
 ひもくのふりすもえ揚を花
 ちる梅の片をみてうき花
 何事そありや花のり心
 心花やえさあれついで
 花をさやうしにたるを花
 花大根もふれりあやを花
 屋飯をたへにりるを花
 心花のを花にすれての
 や花をさやうしと花
 心花のふりあてうき花

一草
 大阜
 乙二
 月化
 道彦
 祥柔
 一茶
 公
 奇例
 鞍凡
 千影

春

花を花屋上の枝にのれり
 ひもくのふりすもえ揚を花
 ちる梅の片をみてうき花
 何事そありや花のり心
 心花やえさあれついで
 花をさやうしにたるを花
 花大根もふれりあやを花
 屋飯をたへにりるを花
 心花のを花にすれての
 や花をさやうしと花
 心花のふりあてうき花

梅間
 優人
 中
 人
 僕
 別
 柳
 非
 流
 南
 一

董子

[The page contains approximately 10 lines of handwritten cursive script, which appears to be bleed-through from the reverse side of the paper.]

筑
地
内

春雲平
東塘
八
太步
蓋村
直
士
如
乙
道
二
亭

春 風

此は、大徳寺の御書也。
 一、徳寺の御書也。
 二、徳寺の御書也。
 三、徳寺の御書也。
 四、徳寺の御書也。
 五、徳寺の御書也。
 六、徳寺の御書也。
 七、徳寺の御書也。
 八、徳寺の御書也。
 九、徳寺の御書也。
 十、徳寺の御書也。

武

應
 泰
 全
 五
 奇
 右
 向
 孔
 長
 擢

蝶

妻のきく風妻持にきりけり
 とふやちかねし来るそふきのき
 あくものきりけりそふきのき
 ちのいきてふとちよふち蝶ふ
 蝶ふやふと人をはてしり
 みの蝶ふふ松の種ふ紙てり
 とふりもふちの中ふ蝶ふ
 蝶ふや女のふのふやふ
 釣ふふふふて眠ふ蝶ふ
 蝶ふやふふねに蝶ふふ
 初蝶のふふふふのふふ

道彦
 三層人
 井有
 柳居
 丁府
 厚醉
 全
 千代
 甚村
 未
 芥之
 向権

風きく人蝶ふふ
 蝶ふて風きくふふふふ
 蝶のふふふのふふふふ
 蝶板のふふふふふふ
 つふふふとふふふふふふ
 一の妻ふふふふふふ
 てふふふふふふふふ
 眠ふ蝶ふふふふふふ
 蝶ふふふふふふふふ
 めふ蝶ふふふふふふ
 初蝶ふふふのふふふふ

公
 曉夢
 難又
 周更
 葉太
 今
 鳥吹
 佛低
 秋風
 坡灰
 保吉

城にめて、飛んかのおれ
ゆのきして麓にさるる城
城飛てる上の人をけへた
城くの人を友なるれ情れ
天地と力なるはを城の底に
ちるふにかるさあそふ城
つやうとすれ城の城も
墨のふのゆ、城のふも
と里に城にさるるを
城のゆえ人もらひさるる
我れ城めるとふわう人

今 五 左 春 士 業 成 如 年
梅 内 竹 海 朗 居 貞 毛 心

流のふれもあつたふ城
青虫の城もめけし小形
来て舞ふ二人さつれとふ
め、城にさるるを城の飛
鏡ゆふとあけ城のとふ
子とするもまけいや城の
なろくとなれらるやふの
ふらふもいふ世とおしとふ
之力をひきとるる城
返屈あふもゆけ飛とふ
ふ、我れ城めるとふわう人

文 大 月 一 首 道 会 奇 素 寒 光
魁 阜 化 草 彦 考 劍 曲 松 卯

釣翁

雨だてふあつても衣を食うは
蝶の来でめるやおをもたいて
あかひのもろすや蝶たぶらへ
思ひ下もあらぬやなやてふれとる
どうもやと掃いて来るふ蝶が
折んと誘ひり来この度のとふ
きこにもこれんれぬるとして
筆の凡てふの力にさゆるとし
まゝお供はれてふの花梅の上
餅後をもてあまたと舞ふ蝶
てふ花は柔好の空の火いさめ

三有

末 懷成 素 肥前

了遠 蘭二 杜例 大江元 月明 月隴 月旌 保吉 護物 幽雅 月旌

乾

鞋

布席
 何如
 柳居
 向旌
 全
 曉甚
 莫太
 全
 秋風
 凡律
 花村

斗入 全 奕鴻 岱青 蘭二 麥雍

夕暮のふやふやあけ
 のうけにわたりしを
 入るふやあけを
 けりくともいふ
 浮沈むあけを
 地ふりたるあけを
 月あけとわたりし
 けりくともいふ
 浮沈むあけを
 地ふりたるあけを
 月あけとわたりし

浙東

士
訓

全全

青岐
電萬

策語

一
醒

成員

地さく原さくある荒れ
 走よ灯の消るまで鳴地
 鳴地すくく鳴地の風さく
 雲かゝるあつたむを鳴地
 曉かゝるあつたむを鳴地
 田一枚さくくあつたむを鳴地
 かゝるあつたむを鳴地
 嫁さくあつたむを鳴地
 いに田にあれば人の地は
 麻の種を粒おてもよく地
 親の親もあつたむを鳴地

全 是 成 豊 祥 禾 可 穀 全 道 考 全 力 化 乙 二 全

ゆめくともあつたむを鳴地
 王もあつたむを鳴地
 鳴地すくく鳴地の風さく
 見覚の地さくくあつたむを鳴地
 校さくくあつたむを鳴地
 家産や地初めくくあつたむを鳴地
 さくくあつたむを鳴地
 今もあつたむを鳴地
 飛きて地さくくあつたむを鳴地
 地さくくあつたむを鳴地
 小田の地さくくあつたむを鳴地

一 草 葛 三 桑 葉 一 茶 全 煮 飯 常 全 魯 原 寒 招 平 角

挂雲 奇剛 子入 幽啼 吳秀 李秀 才芳 李長 由之 米屯 由肆
 江 不弦 溪 尾張

性
子

田
螺

能因、勝をさく地、れ
ち、地芒の道をさく同
物れや他人のさくく地
身、おむとぬ、さく地、れ
健、も、さくけたる地、れ
床、ふ、松の穴、さく地、れ
地、ふ、何、さくれぬ、さく
地、ふ、れ、地、さく、ぬ、さく
地、ふ、れ、な、れ、地、ふ、に、培、
地、ふ、さく、さく、ぬ、さく
地、ふ、ぬ、さく、ぬ、さく

萬 力 丈 擣 檠 松 吳 李 可 萬
 村 化 左 裳 菱 雀 月 尺 省 裳

たうしつゝおのゝ姫のふくま
たうしつゝおのゝ姫のふくま
二二尺信じてたうのりき
たうしつゝおのゝ姫のふくま
音にさうと周をりさ田うお
タウやふれおまにたうしつゝ
まのりきたうのりきふれ
たうしつゝおのゝ姫のふくま
難るふれおの隣をりたう
さうたうのりきおの隣をり

向花 保吉 全 五 不 求 士 花 樗 松 兄 祥 采 道 考

物 燈
物 燈

松の末を信じてたうしつゝ
まのりきたうのりきふれ
かまのりきたうのりきふれ
松の末を信じてたうしつゝ
樗の末を信じてたうしつゝ
まのりきたうのりきふれ
たうしつゝおのゝ姫のふくま
たうしつゝおのゝ姫のふくま
あまのりきたうのりきふれ
る刀堀を信じてたうしつゝ
まのりきたうのりきふれ

尺 丈 葛 乙 少 女 廉 古 玉 我 樗 之 秀 九 枳 磨 大 崎 几 董

飯情

奇居虫

ち新寺

地虫

猫恋

飯情と云つてはるや月のけ
 いひ情やまにりつたる物の市
 方の屋もをきれききききき
 すめばるるこきききききき
 そしあれせえゆるのそけ地虫
 ひつきの猫もあゆるまに
 米ふむ猫やゆりくききき
 栗の粒にきつれつるれ猫
 きき猫の屋もききききき
 ある時ハ根世に明て猫のき
 かりききききききききき

天印 金蔭 樗雲 天印 回人 周更 中権 几董 曉甚 曾醉 葵太

洗つておすのききや猫のき
 猫のき猫のき居るつもの物
 炭垣にききき猫のききき
 ききの猫もきききききき
 とききききききききき
 きき猫やきききききき
 きき猫のきききききき
 ききき一きききききき
 猫のききききききき
 ききききききききき

金 百内 保吉 五内 金 大丸 羅城 露秀 士朗 樗雲 葉兆

ありしうれまうけわけて猫の意
うもろ忘息にいれろや猫の意
智考のいつんかとうん猫の意
いひつあふたの猫の来るまど
よのまねのあうりあう猫の意
けきまの隣もえん猫の意
意猫や七尺の堀やう越
猫の意とむのまもはにう
うもろむのまもに似れぬ意
意猫につけてかえやうも意
猫の意忘せうやうにう

係示

五旗
完来
一草
道考
今
養
吾
伸
奇
蕉
長

春鹿

原麻

木の尾を踏てあふや猫の意
古猫やまきう系にまのお
猫の意外一の南門の意はま
ゆり来る猫の尾目や極本極
秋系大にうもろ猫の意は
猫の妻あま人をわうかり
意すれ猫ももてうん月をわ
ううくもまももまの意麻か
あるまもいんあやまの麻
まハまの麻ま角まううや
たよくと旋にうれをう原麻

係示

子交
三
万
秋
奥
里
太
白
鹿
竹
大

鹿 角

春 鹿

陽 炎

角 鹿 春 鹿 陽 炎
 角 鹿 春 鹿 陽 炎
 角 鹿 春 鹿 陽 炎
 角 鹿 春 鹿 陽 炎
 角 鹿 春 鹿 陽 炎
 角 鹿 春 鹿 陽 炎
 角 鹿 春 鹿 陽 炎
 角 鹿 春 鹿 陽 炎
 角 鹿 春 鹿 陽 炎
 角 鹿 春 鹿 陽 炎

鹿 角
 春 鹿
 陽 炎

鹿 角
 春 鹿
 陽 炎

陽 炎 春 鹿 陽 炎
 陽 炎 春 鹿 陽 炎
 陽 炎 春 鹿 陽 炎
 陽 炎 春 鹿 陽 炎
 陽 炎 春 鹿 陽 炎
 陽 炎 春 鹿 陽 炎
 陽 炎 春 鹿 陽 炎
 陽 炎 春 鹿 陽 炎
 陽 炎 春 鹿 陽 炎
 陽 炎 春 鹿 陽 炎

陽 炎 春 鹿 陽 炎
 陽 炎 春 鹿 陽 炎
 陽 炎 春 鹿 陽 炎
 陽 炎 春 鹿 陽 炎
 陽 炎 春 鹿 陽 炎
 陽 炎 春 鹿 陽 炎
 陽 炎 春 鹿 陽 炎
 陽 炎 春 鹿 陽 炎
 陽 炎 春 鹿 陽 炎
 陽 炎 春 鹿 陽 炎

和尼 汝南 周更 向權 今保 吐丈 瑞芝 吾萍 星謬 唐醉

廿七

風に上てふよりなる風中
 風の中を渡る風の心ありきと
 吹けくも心に歌なりし風中
 切てやる心をさるやいのほめ
 風の中にまきうらぬ松の松
 ゆも又うらぬまの松風中
 風中にひてまの松の松
 ひてまの風中なるまの松にま
 め粒もまの松のまのいのみ
 切風中のまの松のまの松
 のまの松のまの松の風中なる

南 公 子 曉 鬼 雷 士 斗 乙 道 全
旌 公 代 基 秀 雲 訥 六 二 考 全

出代

其は風中よりわが食ふを
 風中の塵にふる。風の令は
 遺生より著て人の紙衣の音
 々々々や。おし子あるは風中
 障のひり。星々も風中の塵に
 恰の多のあふ。いのちの
 風中まのふ。風のやちと
 出代やま。あくと古き新
 出代の一に。ある珠。れ
 出代やま。と。この飯の飽
 出代や君。さ。田の又尺。切

一茶 雲 電 布 茶 榮 油 益 益 村 白 旗 全 曉 基

焼野

裏のこま代男をいふ
 出代のこにまのいふ
 出代やあやめはの杜
 出代やいつもあやめ
 出代の糸もよる縄
 川越てふのてみ焼
 車やれ小南院出代
 越えていふ焼
 中しに焼て焼のま
 台にまのやういふ
 砂を焼や海のあり

保吉 五心 一葉 周更 荻村 向燈 百内 二顧 来紀

焼

田

くらすくらすの焼
 とれてそ松の月
 と焼やほのれたる
 とき氣後うたて
 うとく人の中
 焼とのわき
 白雪のこま
 焼とれ焼
 骨折の
 雪の介
 田や月

保吉 五心 一葉 周更 荻村 向燈 百内 二顧 来紀
 葉 尺 印 帶 道 右 菅 杉 意 保 葉

麻 袴
袴 草
木 實 極
獨 活

陽炎の中人をいれや麻の粒
三日月の輝り極し草ののり
と人や葉よりよく木実極し
うものよや根に下結うとい
妹しといふさうよの匂い
小松木の蕨葉廣く来にけり
蕨のやいさもの葉に指し
めくさや指の深き蕨折
よ蕨の尺に余りしとさか
その井や深し蕨の葉にきて
よ蕨や二日月を照すのや

標雲
雨丹
乃虎
向旌
丈山
几童
甚村
向旌
保吉
一草
枚長

七 華

とさかきといふわさけの蕨
よ蕨や葉のふれぬさう
と置ての蕨さうも垣根
さきていふさうやけり
ふせはあつたさうとけり
さうさういふさうとけり
抱けさういふさうとけり
秋のさういふさうとけり
雨のさういふさうとけり
おのさういふさうとけり
けりさういふさうとけり

三
阿
文角
千代
向旌
全
等老
寛
力芳
丁
太節

秋葉

霜松の如く紅をたつすもの
も鞋の如くもむす秋葉も
山姥の如くも紅をたつすもの

葉兆
花候
雪笠
冬明
春翠

胡葱

胡葱の如くも紅をたつすもの
も鞋の如くもむす秋葉も
山姥の如くも紅をたつすもの

乙二
春翠

市杖

市杖の如くも紅をたつすもの
も鞋の如くもむす秋葉も
山姥の如くも紅をたつすもの

乙二
春翠

市杖

市杖の如くも紅をたつすもの
も鞋の如くもむす秋葉も
山姥の如くも紅をたつすもの

乙二
春翠

秋の書

秋の如くも紅をたつすもの
も鞋の如くもむす秋葉も
山姥の如くも紅をたつすもの

午心

草芳

草芳の如くも紅をたつすもの
も鞋の如くもむす秋葉も
山姥の如くも紅をたつすもの

文児

草子

草子の如くも紅をたつすもの
も鞋の如くもむす秋葉も
山姥の如くも紅をたつすもの

晚翠

草子

草子の如くも紅をたつすもの
も鞋の如くもむす秋葉も
山姥の如くも紅をたつすもの

不知

春草

春草の如くも紅をたつすもの
も鞋の如くもむす秋葉も
山姥の如くも紅をたつすもの

曉甚

春草の如くも紅をたつすもの
も鞋の如くもむす秋葉も
山姥の如くも紅をたつすもの

士龍

春草の如くも紅をたつすもの
も鞋の如くもむす秋葉も
山姥の如くも紅をたつすもの

羅城

春草の如くも紅をたつすもの
も鞋の如くもむす秋葉も
山姥の如くも紅をたつすもの

丈左

前

道

天長地久有時盡
 此恨無窮
 此恨無窮
 此恨無窮
 此恨無窮
 此恨無窮
 此恨無窮
 此恨無窮
 此恨無窮
 此恨無窮

年
 乙
 道
 金
 秋
 白
 丈
 升
 少
 度
 春

記

卷之六

此恨無窮
 此恨無窮
 此恨無窮
 此恨無窮
 此恨無窮
 此恨無窮
 此恨無窮
 此恨無窮
 此恨無窮
 此恨無窮

夢

雅
 天
 村
 金
 蝶
 向
 曉
 金
 漢
 雲
 武

記

ちれふにほのめしけり冬
 ちのふのふれきり冬
 ちれふや光をよめるはのふ
 ちのふにふりけり冬
 ちのふに大なるふり冬
 ちのふや光をよめるはのふ
 ちれふのふにふり冬
 ちれふや光をよめるはのふ
 ちれふに光をよめるはのふ
 ちれふや光をよめるはのふ

今 保 全 斗 士 全 成 一 素
 今 保 全 斗 士 全 成 一 素

鬼も何し思ふはふり冬
 ちれふや光をよめるはのふ
 ちのふにふりけり冬
 ちのふに大なるふり冬
 ちのふや光をよめるはのふ
 ちれふのふにふり冬
 ちれふや光をよめるはのふ
 ちれふに光をよめるはのふ
 ちれふや光をよめるはのふ

力 角 桃 双 桃 枚
 力 角 桃 双 桃 枚

大根菜

五石草

高 乙
辛 葵

され花やこゝろをて二度ゆる
 松明にきた花葉にふりか
 きたふにこゝろをてふりか
 なの花やゆふ路にゆく
 きてやに大根にすゝ花咲ぬ
 中くに大根の芯のこゝろ
 秋一そゝるめもあし大根
 人いかにあつしすゝるあ
 もしきの食にこゝろをて
 とききふに味あつと葵は
 泥まてゆしこゝろをて

上

卷之四

廿

己

播

常陸

何如

乙冰義梅文文成韓向詠海
二石香廬角晁英九民陶人

茄子苗
栽植

梅
芳

し
木

接木

葉なりて引て逝くありしは
葉をかりつゝも葉の端
をもとめたりとむ葉の端
掲留るは世にやとれ
能くとも二葉の掲留
三葉までたればは木
垣越にその語る接木
庭中にありしは正接植
りありし接植より木の
接木して花咲き多くなり
うづむの接木なりし人

卷五

古樂

句
句

瓦全

愛

遁亮

芝村

印旌

保
吉

成英

天

初擧

湯突にか減の出来の擧本か
 ぬれられぬくくちる擧本か
 めたふあふさくれと擧本か
 とじよものひもと擧本か
 晩清のそにゆりあ擧本か
 伝うくハ擧本もあふこのか
 ぬるてぬ合さち初擧
 たへ居るいて来ふに初擧
 雨れだあふひよふ初擧
 あふえうあふひも初擧
 咲もさふ結るにちる初擧

奇創 一葉 一瓢 来迪 忠交 持唐 檮瓦 千代 曉臺 几董 金

犯

初擧 花のふをふちる
 爲たれぬぬけ初さくら
 黄しき初さくらも初擧
 初擧 力いふふにける
 初擧 ものふふの序を
 初擧 羊擧と伝るさち
 雨れだ中にくくも初擧
 咲初さくらあふあふ擧
 ちひひつふもとふ来ぬ初擧
 初擧 花の世の中ふふちる
 げさるやあふえ初擧

俳仙 保吉 大九 五内 綺石 似旭 其岐 恒九 常南 檮堂 金

常

もつちほふとのあきも初様
 あるるゝあるるし俳 初様
 切れたる枕ありやまう様
 其れのものも吹て初様
 かれあや余のうの初様
 れさしといもぬさあ初様
 初子や人をかゝる初様
 けやくと病々曉の初様
 約すも初様とあて初様
 紙衣さふりそゐに初様
 初様余れあはけのさうけり

市堂 蓮夷 今 一 瓜 坊 葛 三 葵 亭 七 高 寒 松 雪 笠 寄 園

初様仲ふれもたう 初
 初様候ふもあはれさ
 位事れ用がさるれと初様
 角又さや世の風書の初様
 ろ奥まの吟まて初様
 初様細き心をやうに初
 常も現いてあはれ 初様
 初冷やまうつあはれ初様
 うは紙にさててさる初様
 貴もにひりりやう初様
 等とれさやうは墨の初様

未 初 中 葉 也 爲 頂 一 門 竺 高 澤 露 荷 真 吾 崔 大 和 墨 侯

待
花

彼岸
花

よふ人いぬる初花
ちるともありてふ初花
花もあはれ初花
初花の二つてふ初花
初花のちる人初花
袖たけ初花
初花やとふ初花
初花や梅の初花
初花の終に初花
初花にひる初花
初花はあはれ初花

崔渚
月英
由之
孫六
一葉
寒松
五城
冬節
調子
可盈

未
花

咲くはあはれいと花

花

龍溪先生題

樓丘太尉碑

三
月

三、なやどしたる圃はるす

弥生

花塚にたれ花をみるは生か

上巳

梔の海も孝向ハ斗何のそし

枕のふもとに海草の並

越く越へ振まつる三々如

枕のふにきて笑ひて桑搦木

夷伯

寬松敬明卓南樗白自樂遙芳

草餅

餅の女誘れて来てさうい
 市の餅花のききし時鳥の
 餅の日に生れたる子に食は
 ばくく延此調なり紙餅
 餅にききしききしや城小被
 油灯のくぬれと餅の
 大餅や鼻のききしきき
 考れしききし餅のくぬれ
 餅柳で花ておる餅のくぬれ
 餅のくぬれと餅のくぬれ
 裁屑のききしきき餅

漫
 漫
 素
 錦
 星
 秋
 可
 山
 李
 莫
 太

寒食

次干

餅の女誘れて来てさうい
 餅の日に生れたる子に食は
 ばくく延此調なり紙餅
 餅にききしききしや城小被
 油灯のくぬれと餅の
 大餅や鼻のききしきき
 考れしききし餅のくぬれ
 餅柳で花ておる餅のくぬれ
 餅のくぬれと餅のくぬれ
 裁屑のききしきき餅

版
 五
 午
 伊
 寒
 多
 莫
 今
 向
 宗

安良祭

盛つては虎ハきん次千ハ
大さやのきん次千ハ
物さうといふ人ハ次千ハ
松の歌ハ次千ハ
海人の信同ハ次千ハ
人出ハ次千ハ
融ハ次千ハ
古蓄の歌ハ次千ハ
より歌ハ次千ハ
月ハ次千ハ
やすハ次千ハ

百
双
成
一
一
等
三
如
連
曉
基

古佐河磯成
壬生念仏

峯入
嵯峨所身拭

とくハ安良花ハ河磯成
安良ハ次千ハ
祝ハ次千ハ
栗原のハ次千ハ
ちハ次千ハ
壬生念仏ハ次千ハ
何事ハ次千ハ
花ハ次千ハ
峰入ハ次千ハ
峰ハ次千ハ

出
祇
太
柔
祓
乃
老
幽
向
几

題
並
春

永日

伽羅のふたは奥まは方拭
持漱に永おのれゆ未
永おのれをぬき忘るる
為量おのれをえぬの永
永おのれを暮れぬたに
人のまねるるをえぬ永
永おのれをわけて破の
永おのれをわけて結ん
永おのれをわけて教の
永おのれをわけてまの
永おのれをわけて新の

文武
莫太
几董
印権
百内
保吉
素丸
風雷
浙江
年人
成英

百十五

永

永おのれを忘るる
永おのれをわけて
永おのれをわけて
永おのれをわけて
永おのれをわけて
永おのれをわけて
永おのれをわけて
永おのれをわけて
永おのれをわけて
永おのれをわけて

永
永
永
永
永
永
永
永
永
永

題叢春

周更 饒基 全 印 旌 莫太 光 益 保 告 素 凡 益 門 存 亞

春

春風吹綠柳
燕子剪輕盈
桃花紅似火
楊柳綠如煙
燕子剪輕盈
桃花紅似火
楊柳綠如煙
燕子剪輕盈
桃花紅似火
楊柳綠如煙

五言
成平
金翠
士卿
折江
金恒

春

春風吹綠柳
燕子剪輕盈
桃花紅似火
楊柳綠如煙
燕子剪輕盈
桃花紅似火
楊柳綠如煙
燕子剪輕盈
桃花紅似火
楊柳綠如煙

五言
管馬
夜六
文兆
沈中
寬松
長高
奏亭
化

題畫春

春 春
夕 元

益する事も許りまされ
夷の夕たてなるをみるを
うきうきの光れまされ
夕暮のさうさうとまされ
親の目とれまされ
牛の角れまされ
まされ夕暮のさうさうと
炉塞て二日居あへり
炉塞て十日居あへり
炉塞て一日居あへり
床起る炉もさうさうと

う

周更 全 有 一 菊 同 丸 寛 祥 一
村 篁 也 丸 来 禾 瓢

炉 塞

自 初

桑 摘

桑 摘

炉塞やんれりる
自初やんれりる
桑摘やんれりる
永きみとれりる
つりて人ありる
そ外て平たなりる
初光の松につりる
桑もつる松につりる
旅人の笠のそりる
夕暮のさうさうと
桑摘やんれりる

桑

鬼水 不 焼 柳 周 更 桑 摘 一 桑 吾 友 三 日 坊 疎 夢

梁兆 年八 不零 大阜 可教 全 葵亭 樓臺 菊也 而池 吸古

下臨 亭 領 戶
九 卦 外 醉 史 吾 莫 文 德 八 上

一掃く所のとるはけり
 様も人々もさうするん
 ぎれ中へさるえぬるに様
 来りたをさるえぬるに様
 自枕のさるえぬるに様
 様物酒をもさるえぬるに
 笑みてあつちへさるえぬ
 ぎれ中へさるえぬるに様
 んよう様もさるえぬるに
 をさるえぬるに様
 酒の料も様もさるえぬる

柳居 園更 眞々 全 甚村 蝶々 几童 五明 全 白旗 全

川島十葉葉様もさるえぬ
 松の葉も様もさるえぬ
 様もさるえぬるに様
 とれほのりにもさるえぬ
 子規のさるえぬるに様
 世の中へさるえぬるに様
 様もさるえぬるに様
 人のさるえぬるに様
 らのさるえぬるに様
 月影もさるえぬるに様
 君の代もさるえぬるに様

重厚 保吉 綺石 斗入 全 晩丸 諸公 天老 全 兼右

咲より人もある様
 陽にそれくにある様
 折て来る様に風の吹より
 望むまゝ様もあつてし
 足ありツノの様にさうり
 様もそやまゝの様に
 足厚いせうに様も
 いふ様もさうり
 かゝりて実なる様に
 いふ様の木も花も
 いふやうなる様に

草十
 下 梅
 三 飲
 丁 類
 未 廣
 一 草
 南 地
 鳥 老
 夢 亭

危様にいへても
 我らもさう
 急のなるまゝ
 木家の外に
 松ありそ
 井に入
 世の中を
 何れも
 傾く
 いふ
 なる

長 島
 本 河
 赤 岡
 換 赤
 武 陵
 一 茶
 回 人
 万 和
 幽 味
 双 馬
 漫 乙

裏面より見て吸喰ふ様
 りの里を人の入て居る様
 極本底に様沸く吹く様
 あやまの波様も成てとるあり
 世の中いたに様の一重の
 りの本れりものもの様
 許に雀人に様の木る
 まむし春をうくる様
 世の中をよやくに居る様
 松のまゝつゝ様
 袋士といふは様より来し

似康 文心 官胤 放準 運山 板ま 朱亮 古梁 柑翠 忍心 妙中
肥子

様を垂るの味と居るや
 とつとつと居る様の木底
 鉤うらね様下折本のる
 花ちちちに見えさく様
 廻極にのきも子む様
 局そのよりつと居る様
 走ふは風様人のまゝ居る
 糸さへあは様ハ吹くや
 海をよしありて様のり
 衣をくれは又まあるは様
 酒をて様をるより居る

何丸 巴山 鵬鰐 松居 春雄 松江 有我 無物 南苑 昭有 東宣
信茂 成秀 但号 伊勢 小島 但号 堂隆

噴きもちりてあつたしゝの様
 人・声・灯・も・し・頃を様ちる
 ちる様先ん言ふよはれま
 うちりてあにちるさめ又様
 男も女も橙屋で様ちる
 之尺の短鰐にちるささ
 世の舟や様ちる来るさめ度
 けりくと見てそれかちる様か
 の様人をえりてあにけり
 際あけのみにちるゝの様

江

全 黃 向 全 兒 保 全 斗 士 竟 履
村 雄 董 吉 入 劫 平 煉

散

機

上

全

香村

印
雄

全

凡
量

保
吉

全

斗入

士
切

竟平

羅城

入るや様へ人をとるとん人
 の様へうん人へのん人
 出つる花のともちる様
 ちれへええへんれへ様
 照りんやうてちる様れ
 おのふんぬる急をちる様
 小鹽もふとあれへちる様
 ちりへちる様へちる人へ
 本れそとをえへちる様か
 ぎぎれおのり来やえ様
 ぬぬれきりりりしへ様

伊 年 欣
 五 榎 五
 成 榎 五
 可 榎 五
 岳 榎 五
 長 榎 五

刀を洗へたのちちる様
 ぬるにえのつて来る様
 登るたれへちる様
 ちる様一度にちるりりり
 勢りけし勢りえとちる様
 偽へ人へちるりちる様
 人へちるりちるりちる様
 着るれへちるりちる様
 へ様へちるりちる様
 足るるにへちるりちる様
 へちるりちるりちる様

為 老
 寄 老
 雲 榎
 寛 榎
 護 榎
 菊 榎
 申 榎
 龍 榎
 権 榎
 釣 榎

八重櫓
連櫓

数合ては八櫓の如くは
ふある人にてはて櫓
触るは其の如くは
板にやうなれはて櫓
人よりなてはて櫓
火ともは二重の衣を
袖のちき人のうへ
八重櫓とてはて櫓
花よりなてはて櫓
底よりなてはて櫓

東陽
詠吟
壺半
乃流
木南
真澄
楚清
存西
道亮
梅岡
几董

片やとてはて櫓
八重櫓とてはて櫓
世中一の如くは
櫓のちき人のうへ
八重櫓とてはて櫓
花よりなてはて櫓
底よりなてはて櫓

晚菫
存西
松井
茂雄
樗牛
全
丘
全
可親
乃居
全

逐櫓もさるるをう喰ひたる
 金銀はて日暮持ちけり逐櫓
 平押に着てゆへに逐櫓
 漸にえき持たぬれに逐櫓
 沖中此際迄ふに逐櫓
 遙く見えて場をもつ櫓か
 争ふあてとてや逐櫓
 酔ふ重く天下時ぞあるの心
 ちとや花よりたがむ枝の光
 ゑんほと動みたるまの春
 をいふと折れてふのまゝ

未開
 寬松
 米光
 方舟
 吾雀
 魚眼
 枳殼
 馬酥
 開更
 曉甚
 薤太

多量のすくすくの中
 とむしるに鉄がふのふい
 花はれうの機よるうめいハ智也
 志に群れて海とさ情お松子
 花に束す志に若成はいまも
 まてあやれふみたりや位と戸
 志のうこれきてそんの竹はか
 花の木や庭ありの石子を
 花の世にもりて雲より流せ心
 の花やひらたく見あるもの心
 志に来るようしの人の旅をけ

几董
 全
 角
 黃
 左
 百
 坡
 保
 板
 素
 六
 憲
 九
 流
 岩
 灰
 明
 村
 燈

うちとけて見ゆるふの木の葉は
花のよき葉に似てふの葉に
花の葉に似てふの葉に
花の葉に似てふの葉に
花の葉に似てふの葉に
花の葉に似てふの葉に
花の葉に似てふの葉に
花の葉に似てふの葉に
花の葉に似てふの葉に
花の葉に似てふの葉に

武陵
蕉雨
桂樹
志宇
漢物
雨塘
同人
三人
人
か
吳光

八寸の後赤ひくくやふの如
花をより根むの有り世々
咲くハ花もよりあるカハ
花の心後掃や、赤い藤に
花より来てやういふ花の平
花咲て株をみする藤をむね
花より二粒をさき藤に
花より花やむの赤い花より人
おひん人やふに咲くは赤い花
花より今ふ花藤のさき藤
とけりやういふ花も藤の赤

秋更
枚長
花六
文兆
其太
其映
其也
其雲
其帆
其回
其院

赤事と花をぬふのさう
花よりもふ花よりをむね
花の心後掃や、赤い藤に
花より来てやういふ花の平
花咲て株をみする藤をむね
花より二粒をさき藤に
花より花やむの赤い花より人
おひん人やふに咲くは赤い花
花より今ふ花藤のさき藤
とけりやういふ花も藤の赤

乙
馬今
吐大
桃子
快基
大藤
可友
三花
吾友
菊院

題叢春

花巻

花をみて秋へ来りし物も
 ころもと物もさうや花の時
 多しおとよの花の時
 花のよき方端へにふす
 とも世にそまらぬもの
 木のりうらうらふもの
 花のむすこちむすこち
 人にもあつたにふす
 ふす様の花はさう
 花巻とふすもの
 花巻

花巻

世作
 誠序
 眠石
 柳二
 馬逸
 茶味
 左節
 成表
 存照
 持表
 公

花 雨

花 電
花 電 吹
花 見

花を雨に濡れしを雨に中
折るをためしを雨の雨
いづれの雨に濡れしを雨の雨
其の雨に濡れしを雨の雨
花を雨に濡れしを雨の雨
花を雨に濡れしを雨の雨
花を雨に濡れしを雨の雨
花を雨に濡れしを雨の雨
花を雨に濡れしを雨の雨
花を雨に濡れしを雨の雨

重原
順丸
新江
素所
魯原
橋虫
かゆ
乙二
考益
寺村

かしこもをえにまゐるを望はひ

金かよそ踊るを望はひ

青るり花を望はひ

花を望はひ

十二百持もつかを望はひ

親とを望はひ

花を望はひ

起るに花を望はひ

花を望はひ

死に花を望はひ

死に花を望はひ

几童

公

成青

花

斗

乙

花

花

士

公

存

望の相を二天入るをの本のま
 しの影を投るをえの青珠
 うわくとをえて度る懐
 旅のま似してまの宿をえ
 をとるんハ親をえしを
 家のまれつるをえしを
 をえるまのてをえしを
 をえとるにをえしを
 ある方の月をえしを
 旅人ハわをえしを
 何々の素をえしを

隆興
 少
 三
 少
 三
 少
 三
 少
 三
 少
 三

折花
 花

ながしや花の端の星の光
 かろくどてあるをの光
 花をえしを
 花をえしを
 花をえしを
 花をえしを
 花をえしを
 花をえしを
 花をえしを
 花をえしを

暗牛
 南
 胡
 月
 共
 其
 乙
 一

佳
 雙
 常陸
 如
 似
 志
 菊
 柯
 榎
 佳
 似
 雙
 視
 羅
 秀
 凡
 及

文卿 著 卷第 擢良 柳居 奇 公 周更 饒基 覽 白姓

曉や人かきしん枕の露
 網を切訖しあまのや枕の露
 自折たる枕より露にまみれ
 まれ戸にふけりし枕の露
 まれ事いふて枕の花見ぬ
 切株の枕はいつと答ふる
 又能はぬと云ふを来て枕の露
 枕とてやあまのちとて
 當れさうりてきしめれ
 江に流す廻れりてきしめ
 一時に春は起てりてきしめ

集

今 几 董 保 吉 五 明 大 凡 眩 屯 檮 杌 春 俱 沙 羅 事 大 端 隆

卿をいひた外にあすはれ花
 ちれ花屋手流れも流しに
 あまのちれ花も流して枕の露
 當も流してきしめれ花
 人のふれあれはあすはれ花
 楓にうり月かきしめや枕の露
 厭ふてもさうりてきしめ花
 厚のくささとのまれ花は花
 おてきしめさうりて枕の露
 舟とて自れに花さうりて花
 枕の露は花運に花れし人

以戸

伊勢

乃 亮 公 三 一 草 雲 桂 芳 益 大 河 奇 剛 権 剛 子 均 廉 古

梨

花

おとすれは洲や柳の花
ひらひらと風樹の柳の花
向ふしや枝のまわたりて花
柳の花さふふたふれり
はるれふたふたふれり柳の花
かきまの枝まわり柳の花
枕の花さうけふれりし
常もは常と跪へおそれ花
梨の花月夜書よび女あり
物よりや藤よりしる梨の花
これふや梨一本花は

花

花

優物 星清 釣瓶 様老 茶巡 材唐 ぢみ 曉菫 葉お 向旗 周更

おとすれは洲や柳の花
ひらひらと風樹の柳の花
向ふしや枝のまわたりて花
柳の花さふふたふれり
はるれふたふたふれり柳の花
かきまの枝まわり柳の花
枕の花さうけふれりし
常もは常と跪へおそれ花
梨の花月夜書よび女あり
物よりや藤よりしる梨の花
これふや梨一本花は

花

おとすれは洲や柳の花
ひらひらと風樹の柳の花
向ふしや枝のまわたりて花
柳の花さふふたふれり
はるれふたふたふれり柳の花
かきまの枝まわり柳の花
枕の花さうけふれりし
常もは常と跪へおそれ花
梨の花月夜書よび女あり
物よりや藤よりしる梨の花
これふや梨一本花は

花

疎葉 以友 保吉 松井 完来 祥来 塊翁 漢物 子影 花亭 可友

山吹花れいさす青柳
 山吹やきてる人似人
 山吹にまけやとて地生
 山吹はあかすりみ長き
 山吹やいふ様の人通り
 山吹にまけす地生
 山吹やゐに棲まの亂れし
 まのいふなりや山吹の雨に
 山吹を隠れするは木野うき
 山吹や依いほるれを
 山吹にまけさるるは木野

恒九 眉山 樗密 棠北 一草 素馨 夷松 横雲 覆物 雨塘 星譜

木瓜花

木瓜花
 沉丁花

山吹やそ履のめる簪の池
 山吹や海の端にまよふ
 山吹やまけさるる小春
 山吹のまのりつるは木野
 山吹はまけさるるを筆に
 日のけや古井に木瓜の咲に
 ちりまけさるる木瓜を木
 木瓜に卧てまけさるる木瓜
 登森するんを沈丁花
 沈丁花にまけさるる木瓜
 まけさるる木瓜を木瓜

木瓜 恒九 眉山 樗密 棠北 一草 素馨 夷松 横雲 覆物 雨塘 星譜
 木瓜 恒九 眉山 樗密 棠北 一草 素馨 夷松 横雲 覆物 雨塘 星譜

追憶して横江の心葉、これ
 死に命はたは葉に花の病
 骨接し人にさす、さ葉は
 むし、男すゝめ葉氣葉子
 ちく、れゑの恥よ叶の葉
 りや葉葉のれの序、在
 人葉の葉、さすに葉子
 葉かや今、さす、さ
 投あけし小田に、葉や葉子
 通に、さす、葉子
 葉子、人、葉を、さす、さ

思ふのゆゑに泣きわらふ
とほれにふた忘れの花を
并に花をうちりし葉も
汁のまゐるて妹よ葉は
袖とれて思ひをもあへて
娘に傳へ葉は今も咲やう
志居しや心細い葉人を成
すの只むかしと折け葉子
腰の帯も葉つきにむく
ある心にあり葉はさす
為度には咲くそすれこそ

小松の松より介の葉の風
葉の風人整うれは暖だるん
ひやうるちふんやも葉の
松の風やうれ葉の葉の
あふるふたれ松の葉の
子代の月を松の葉の葉の
能うれ松の葉の葉の
葉の松の葉の葉の
松の葉の葉の葉の
松の葉の葉の葉の

力に
葉の
平角
葉の
葉の
葉の
葉の
葉の
葉の
葉の

芽花

葉の松の葉の葉の
松の葉の葉の葉の
松の葉の葉の葉の
松の葉の葉の葉の
松の葉の葉の葉の
松の葉の葉の葉の
松の葉の葉の葉の
松の葉の葉の葉の
松の葉の葉の葉の
松の葉の葉の葉の

葉の
葉の
葉の
葉の
葉の
葉の
葉の
葉の
葉の
葉の

青 菱

方 文 抗

之 力 業

義 荷 非

泰 氣

為○大○此○此○此○此○
 休○年○機○此○此○此○此○
 流○此○此○此○此○此○此○
 川○此○此○此○此○此○此○
 義○此○此○此○此○此○此○
 字○此○此○此○此○此○此○
 故○此○此○此○此○此○此○
 據○此○此○此○此○此○此○
 心○此○此○此○此○此○此○
 志○此○此○此○此○此○此○
 其○此○此○此○此○此○此○

天 亦
 可 忍 也
 力 居
 藝 亭
 玄 地
 一 泰
 方 永
 其 越
 布 再
 秀 九

幕

藤

據○此○此○此○此○此○此○
 藤○此○此○此○此○此○此○
 伐○此○此○此○此○此○此○
 藤○此○此○此○此○此○此○
 山○此○此○此○此○此○此○
 藤○此○此○此○此○此○此○
 欲○此○此○此○此○此○此○
 故○此○此○此○此○此○此○
 附○此○此○此○此○此○此○
 藤○此○此○此○此○此○此○
 水○此○此○此○此○此○此○

竟 尤
 自 燈
 今 童
 几 童
 登 祈
 曉 甚
 保 吉
 斗 入
 石 蘭
 士 蘭
 晚 丸

龍

春城弄海成平心
祥禾力記
魯隱
尺丈
奇剛
雪筆

蕉肉 爽松 麥亭 護物 菊也 老阿 星譜 志牢 系紀 文角 女漢 漢

水草生
岸生初

原をわたりぬるのこゝろと
延帆にゆきぬる見ゆれ原にわ
るなりておろきぬるの使
白原中れにふくる天の河
をききぬるを原のぬれぬ
ぬれぬをわたりぬるのぬ
かきぬるて見るなり原のぬ
をききぬるを原のぬれぬ
そのけけぬるなり原のぬ
力にぬれぬるなり原のぬ
原をわたりぬるなり原のぬ

美奈
三島
沙南
巴人
徐英
右之
古猿
夫己
梅権
万亮
向権

蛇出穴
鼠化威勢
麦熟
草葉
岸席
雲入る
岸生初

生初る岸をわたりぬる
蛇穴をぬるなり原のぬ
熟なり鼠に花にうけぬる
うけぬるなり麦をわたりぬる
麦熟なり草をわたりぬる
草の葉やふ入りぬるなり
草にふたりぬるなり原のぬ
はきぬるなり原のぬれぬ
をききぬるなり原のぬ
原をわたりぬるなり原のぬ
岸をわたりぬるなり原のぬ

長翠
成貞
五明
寛松
本芳
万亮
夜来
周更
外六
万和

爲物操
站靶調

春
蚊

井ノ口、其のまゝの鳴子鳥
川鴨や鳴わつてゐたは
ふりもなない息でゐる小鴨が
見えて、またまた喉で囀
調をせんとしひきひきと
空石を指くばさう、小瓶が
あふみだすに、小瓶が
あふみだすに、小瓶が
曉に電灯の光る小瓶が
みねや花の中へ、あそび
まじりのまじり、あそび

玉玦 胡準 倚凡 共批 砂文 柳君 薨左 芦涯 奇劇 吳服 刀虎

別
衆

春春
雨雨

丁小窓にありけりなりぬる
なるは木に立や二階にあり
鈴も葉にありたりあり
春の病にのみ病よりある
春の病に登るて春の雨
細くは蝶かきすやとれ
春白や美の下なる春に
春白や鼻打窓むさしの面
春白や笑ふれまのうら
一白うたれ春を春に白
春白や人にて嬌聲をも

白旌 大左 遲柳 道亮 擇元 為碑 几童 公 女子 代 燦多 黃松

春衣や春衣の春衣の春衣の
 春衣や春衣の春衣の春衣の
 春衣や春衣の春衣の春衣の
 春衣や春衣の春衣の春衣の
 春衣や春衣の春衣の春衣の
 春衣や春衣の春衣の春衣の
 春衣や春衣の春衣の春衣の
 春衣や春衣の春衣の春衣の

春衣 春衣 春衣 春衣 春衣
 春衣 春衣 春衣 春衣 春衣
 春衣 春衣 春衣 春衣 春衣
 春衣 春衣 春衣 春衣 春衣

春衣の人の春衣の春衣の春衣の
 春衣や春衣の春衣の春衣の
 春衣や春衣の春衣の春衣の
 春衣や春衣の春衣の春衣の
 春衣や春衣の春衣の春衣の
 春衣や春衣の春衣の春衣の
 春衣や春衣の春衣の春衣の
 春衣や春衣の春衣の春衣の

春衣 春衣 春衣 春衣 春衣
 春衣 春衣 春衣 春衣 春衣
 春衣 春衣 春衣 春衣 春衣
 春衣 春衣 春衣 春衣 春衣

春衣 春衣 春衣 春衣 春衣
 春衣 春衣 春衣 春衣 春衣
 春衣 春衣 春衣 春衣 春衣
 春衣 春衣 春衣 春衣 春衣

春のさるは二日強て春のさる
 春のさるは二日強て春のさる
 春のさるは二日強て春のさる
 春のさるは二日強て春のさる
 春のさるは二日強て春のさる
 春のさるは二日強て春のさる
 春のさるは二日強て春のさる
 春のさるは二日強て春のさる
 春のさるは二日強て春のさる
 春のさるは二日強て春のさる

乙二 端 丘 午 其 沙 木 春 士
 二 端 丘 午 其 沙 木 春 士

春のさるは二日強て春のさる
 春のさるは二日強て春のさる
 春のさるは二日強て春のさる
 春のさるは二日強て春のさる
 春のさるは二日強て春のさる
 春のさるは二日強て春のさる
 春のさるは二日強て春のさる
 春のさるは二日強て春のさる
 春のさるは二日強て春のさる
 春のさるは二日強て春のさる

乙二 端 丘 午 其 沙 木 春 士
 二 端 丘 午 其 沙 木 春 士

錦江樓臺翳起
魯隱萬松南
湖詩曰三唐人
蕉雨卓池

梅洞漫史五芳廉古升古雲第左銘渭川廉池有斐

喜の心を 喜の心を 喜の心を
 喜の心を 喜の心を 喜の心を
 喜の心を 喜の心を 喜の心を
 喜の心を 喜の心を 喜の心を
 喜の心を 喜の心を 喜の心を
 喜の心を 喜の心を 喜の心を
 喜の心を 喜の心を 喜の心を
 喜の心を 喜の心を 喜の心を
 喜の心を 喜の心を 喜の心を
 喜の心を 喜の心を 喜の心を

雙旭
 雙
 雙
 雙
 雙
 雙
 雙
 雙
 雙
 雙

春の人

己

春の心を 春の心を 春の心を
 春の心を 春の心を 春の心を
 春の心を 春の心を 春の心を
 春の心を 春の心を 春の心を
 春の心を 春の心を 春の心を
 春の心を 春の心を 春の心を
 春の心を 春の心を 春の心を
 春の心を 春の心を 春の心を
 春の心を 春の心を 春の心を
 春の心を 春の心を 春の心を
 春の心を 春の心を 春の心を

雙旭
 雙
 雙
 雙
 雙
 雙
 雙
 雙
 雙
 雙

陸秀

江

伊

卷四

常陸

大和

陸

此中鬼手一止福九路一鬼孫大爺

春
生

兒童
向桂
覽甚
保右
石蘭
昭九
謀為
長翠
月雲
榜雲

婿人ふめいさうしてそのれ
 杉海にささうるもそのの
 灯ともさはさうするもそのの
 枕うそふひるるもそのの
 鈴糸の中流り其のの
 響みきこえたる其のの
 小男麻衣踏濁る其のの
 檣枕に来て、言あり其のの
 枯草やまを折らぬ其のの
 車のあつて小くまた其のの
 ちよろくと先もさる其のの

升之 芳之 我員 今 華伯 雙既 完來 午人 弟里 后亮 月化

携杖
 金華
 金童
 袋書
 恒凡
 眉山
 樗童
 道亮
 曹三

行書

一茶
雨塘
春曉
免鄉
真光
華村
公
葵花
几
五
角
白
旗

ともあへぬものゝ素やをば
 りをたれしはなるんあ
 りをやれしはなるんあ
 りをやれしはなるんあ
 りをやれしはなるんあ
 りをやれしはなるんあ
 りをやれしはなるんあ
 りをやれしはなるんあ
 りをやれしはなるんあ
 りをやれしはなるんあ
 りをやれしはなるんあ

曉葉
 市
 保
 也
 文
 大
 二
 斗
 存
 眉

白藤みよこれと素をば
 りをたれしはなるんあ
 りをやれしはなるんあ
 りをやれしはなるんあ
 りをやれしはなるんあ
 りをやれしはなるんあ
 りをやれしはなるんあ
 りをやれしはなるんあ
 りをやれしはなるんあ
 りをやれしはなるんあ
 りをやれしはなるんあ

中
 公
 有
 兼
 成
 車
 可
 左
 冥

りをのたをさる海辺か
 ゆるをを嘆いさるり杜あ
 りをの先に立ちり時の松
 りをやいつ国をさるふ田の
 中をくともいそよのへにま
 りをを都をさるのそく
 りををさるりり餅さる
 りをのふりり見ゆる山路か
 るのい素をのい素も似る
 つやをさるりりをの指りか
 りをやおのふた似る夢のそ

塊菰 魯隱 桂雲 電桂 一茶 寄笠 寄園 長島 雄劍 瑞可 澄之

水林

三氏

りをのたをさる海辺か
 りをを都をさるのそく
 りをのふりり見ゆる山路か
 るのい素をのい素も似る
 つやをさるりりをの指りか
 りをやおのふた似る夢のそ

葉寸 床人 其樂 海樂 幽嘯 冥也 仙風 秋史 其成 掛翠 詠海

三月尾

春 雜

りをた衣ほしきり襟の舟
 りやや流にぬるる流の舟
 りやや流にぬるる流の舟
 足跡しきまみちやまのり
 三月にふれてりやつの海
 雲をぬれぬまのつふみち
 雲をぬれぬまのつふみち
 りをた衣ほしきり襟の舟
 花をた衣ほしきり襟の舟
 花をた衣ほしきり襟の舟
 戸をた衣ほしきり襟の舟

弓 槌
 東 崔
 祖 明
 汝 南
 枕 流
 梅 岑
 綺 石
 士 内
 空
 斗 入
 柳 莊

荒海や大いなる舟の矢

花と花と花と花の舟

花と花と花と花の舟

花と花と花と花の舟

花と花と花と花の舟

花と花と花と花の舟

花と花と花と花の舟

花と花と花と花の舟

花と花と花と花の舟

花と花と花と花の舟

桂 五
 布 舟
 張 六
 肩 心
 升 六
 菜 虎
 乙 二
 今
 道 亮
 一 茶
 塩 前

多のうし一白はれを四
契とのをさいつを原つし
林柳世はまふれてゐる
をんあまふれうやう
ちうものいさき本のそや
老道ににふる今名まゐる
雪と煙うあひを本の
本のまふ柳のいさき
雪れ雪のまふまふ柳れ
まのいさき人やつてまふ
斯うまふれて足る飛の

力他 舟 松 瑞 魚 傍 石 詠 古 柳
浪 洲 江 子 風 海 吟 面 笑

おまふるうし一白はれを四
契とのをさいつを原つし
林柳世はまふれてゐる
をんあまふれうやう
ちうものいさき本のそや
老道にににふる今名まゐる
雪と煙うあひを本の
本のまふ柳のいさき
雪れ雪のまふまふ柳れ
まのいさき人やつてまふ
斯うまふれて足る飛の

杜 夢 富
山 南 家

正札

卷之六



 長生



尾野大石

○四百八尾

陽明

